

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第46集

志<sup>し</sup>戸<sup>ど</sup>平<sup>ひ</sup>遺<sup>ら</sup>跡(3次)  
頭<sup>か</sup>田<sup>し</sup>遺<sup>ら</sup>跡<sup>だ</sup>

鬼<sup>ま</sup>付<sup>つ</sup>女<sup>め</sup>川<sup>が</sup>河<sup>か</sup>川<sup>が</sup>改<sup>か</sup>良<sup>り</sup>事<sup>じ</sup>業<sup>ぎょう</sup>に<sup>に</sup>伴<sup>た</sup>う<sup>う</sup>発<sup>は</sup>掘<sup>くわ</sup>調<sup>てう</sup>査<sup>さ</sup>報<sup>ほう</sup>告<sup>こ</sup>書<sup>しょ</sup>

2001

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第46集  
 志戸平遺跡(3次)・頭田遺跡 正誤表

ページ	章	節	節頭からの 行数	誤	正
2	第I章	註	2	主体を示す	主体を示す
4	第II章	第1節	6	調査は開始時に	調査開始時には
47	第IV章	第2節	13	停滞していた	停滞していた

し ど ひ ら  
志 戸 平 遺 跡(3次)  
か し ら だ  
頭 田 遺 跡

鬼付女川河川改良事業に伴う発掘調査報告書



2001

宮崎県埋蔵文化財センター

## 序

埋蔵文化財の保護・活用に対しましては、日頃からご理解をいただき厚く御礼申し上げます。

このたび宮崎県教育委員会では、鬼付女川河川改良事業に伴い志戸平遺跡と頭田遺跡の発掘調査を行いました。本書はその報告書です。

両遺跡では、洪水砂のなかから前期から終末期の多くの弥生土器が良好な状態で出土し、志戸平遺跡からは同時代の水田経営に関連があると思われる木製品も出土しています。宮崎県の弥生時代の資料として、貴重なものとなることでしょう。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

調査にあたってご協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言をいただいた先生方、並びに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成13年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 矢野 剛

## 例 言

1. 本書は、鬼付女川河川改良事業に伴い宮崎県教育委員会が行った志戸平遺跡および頭田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、志戸平遺跡を平成6・7年度に一ツ瀬土地改良事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県文化課が、頭田遺跡を平成9年度に高鍋土木事務所の依頼を受け宮崎県埋蔵文化財センターが行った。
3. 発掘調査の期間は、志戸平遺跡が平成6年11月28日から12月26日および平成7年度12月11日から1月19日まで、頭田遺跡が平成9年11月25日から12月25日までである。
4. 現地での実測等の記録は、菅付和樹、高橋誠、和田理啓が行った。
5. 本書に使用した写真は菅付、高橋、和田が撮影した。
6. 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成、実測、トレースは主として高橋、和田が行い、一部を整理作業員の協力を得た。
7. 本書で使用した位置図は国土地理院発行の5万分の1図をもとに作成し、調査範囲図は高鍋土木事務所作成の千分の1図をもとに作成した。
8. 土層断面および土器の色調は農林水産省農林水産技術会事務局ほか監修の『新版標準土色帳』によった。
9. 本書で使用した方位は、M. N. と記してあるものが磁北、G. N. と記してあるものが座標北（座標第Ⅱ系）である。また、レベルは海拔絶対高である。
10. 本書の執筆・編集は主として第三章を高橋、それ以外を和田が行った。
11. 本書では、註については各節末尾に、参考文献については本文末にまとめて記している。
12. 志戸平・頭田の両遺跡では、株式会社古環境研究所に自然科学分析を委託した。その結果は、本書に付編として掲載している。
13. 出土遺物・その他の諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

## 本文目次

第Ⅰ章 はじめに		第3節 遺物	43
第1節 調査に至る経緯	1	第4節 小結	45
第2節 調査の組織	1	第Ⅳ章 まとめにかえて	
第3節 調査の位置と環境		— 志戸平遺跡出土の壺・壺に関する検討 —	
1. 立地と周辺の遺跡	1	第1節 はじめに	47
2. 歴史的環境	2	第2節 南九州弥生土器研究の現状	47
第Ⅱ章 志戸平遺跡の調査		第3節 志戸平遺跡出土の壺・壺に関する検討	47
第1節 調査の概要	4	第Ⅴ章 結語	49
第2節 層序	4	付編 自然科学分析調査報告	
第3節 遺物	4	第1節 志戸平遺跡出土試料の放射性炭素年代測定結果	53
第4節 小結	10	第2節 頭田遺跡における自然科学分析	53
第Ⅲ章 頭田遺跡の調査			
第1節 調査の概要	39		
第2節 層序	39		

## 挿図目次

第1図 志戸平遺跡・頭田遺跡および 周辺遺跡分布図	3	第15図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(壺)	21
第2図 志戸平遺跡・頭田遺跡調査区位置図	5	第16図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(壺)	22
第3図 志戸平遺跡(3次)A区全体図および 土層断面図	6	第17図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(壺)	23
第4図 志戸平遺跡(3次)D区全体図	7	第18図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(壺)	24
第5図 志戸平遺跡出土遺物実測図 縄文土器・弥生土器(鉢)	11	第19図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(壺)	25
第6図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(鉢・壺)	12	第20図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(壺)	26
第7図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(壺)	13	第21図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(壺・高坏)	27
第8図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(壺)	14	第22図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(高坏・器台)	28
第9図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(壺)	15	第23図 志戸平遺跡出土遺物実測図	29
第10図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(壺)	16	第24図 頭田遺跡基本土層図	39
第11図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(壺)	17	第25図 頭田遺跡周辺地形図	40
第12図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(壺)	18	第26図 頭田遺跡調査区地形図(Ⅳ層) 及び土層柱状図	41~42
第13図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(壺)	19	第27図 頭田遺跡出土遺物実測図	44
第14図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(壺)	20	第28図 志戸平遺跡出土壺・ 壺編年図(案)	51~52

## 表 目 次

第1表 志戸平遺跡出土遺物観察表①	30	第6表 志戸平遺跡出土遺物観察表⑥	35
第2表 志戸平遺跡出土遺物観察表②	31	第7表 志戸平遺跡出土遺物観察表⑦	36
第3表 志戸平遺跡出土遺物観察表③	32	第8表 志戸平遺跡出土遺物観察表⑧	37
第4表 志戸平遺跡出土遺物観察表④	33	第9表 志戸平遺跡出土遺物観察表⑨	38
第5表 志戸平遺跡出土遺物観察表⑤	34	第10表 頭田遺跡出土遺物観察表⑩	46

## 図 版 目 次

志戸平遺跡現場写真①	57	頭田遺跡遠景	63
志戸平遺跡現場写真②	58	頭田遺跡全景	63
志戸平遺跡出土遺物①	59	木片検出状況(北から)	64
志戸平遺跡出土遺物②	60	木片検出状況(東から)	64
志戸平遺跡出土遺物③	61	頭田遺跡出土土器	64
志戸平遺跡出土遺物④	62		

# 第I章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

鬼付女川は、複雑に蛇行する川幅の狭い小河川であり、大雨の際にはたびたび氾濫し付近の住民生活に大きな影響を与えていた。特に昭和58年の集中豪雨の際には新富町市街地が浸水し大きな被害を与えた。このような事情を考慮し、宮崎県では昭和59年度より鬼付女川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う治水のための河川改修工事が実施されることとなった。これに伴い、昭和59・60年度に鬼付女西遺跡、昭和61年度に園田遺跡、平成2から3年度には城ノ下遺跡、柳原遺跡、志戸平遺跡（2次）の発掘調査が実施されている。

志戸平遺跡は、一ツ瀬土地改良事務所の依頼を受け平成6年11月28日から12月26日および平成7年12月11日から平成8年1月19日まで調査を行った。頭田遺跡については高鍋土木事務所の依頼を受け平成9年11月25日から12月25日まで調査を行った。

## 第2節 調査の組織

志戸平遺跡および頭田遺跡の調査の組織は次のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

志戸平遺跡（平成6年度）		（平成7年度）	
教育長	田原直廣	同左	
教育次長	八木 洋・中田 忠	同左	
文化課長	江崎富治	同左	
課長補佐	田中雅文	同左	
主幹兼庶務係長	高山恵元	同左	
主幹兼埋蔵文化財第一係長	岩永哲夫	主幹兼埋蔵文化財第二係長	岩永哲夫
主事（調査担当）	和田理啓	主査（調査担当）	菅付和樹
		主事（調査担当）	和田理啓

### 頭田遺跡（平成9年度）

宮崎県埋蔵文化財センター

所長	藤本健一
副所長兼調査第二係長	岩永哲夫
庶務係長	三石泰博
主事（調査担当）	高橋 誠

## 第3節 遺跡の位置と環境

### 1. 立地と周辺の遺跡

志戸平遺跡および頭田遺跡は、新田原台地から富田浜入江に流れ込む鬼付女川の両岸、南北を丘陵に挟まれた標高約7～9mの狭小な沖積地上に位置する。北の丘陵上に弥生時代中期の環壕集落が確認された鍛遺跡（第1図-39）、東南東の沖積地上には鬼付女西遺跡（第1図-5）や園田遺跡（第1図-7）、さらに西南西の新田原台地上には新田原遺跡（第1図-12）など弥生中期から後期にかけての集落跡が顕著にみられる地域のひとつである。志戸平遺跡の近辺では、平成3年度に新富町教育委員会が発掘

調査を行った<sup>ホノハチ</sup>風早第Ⅱ遺跡（第1回-3）で、弥生時代後期と考えられる井堰の跡が確認できている（新富町教育委員会1992）。

## 2. 歴史的環境

宮崎県下における弥生時代の遺跡は、現在、有機的な解釈が可能なほどの材料には恵まれていない。特に、生産遺構でこの時期まで遡るものは県下では一例も確認できていない。

集落遺跡に関していえば、高鍋町持田中尾遺跡（高鍋町教育委員会1982）、新富町鐘遺跡（新富町教育委員会1983）、西都市松本原遺跡、宮崎市下郷遺跡（宮崎市教育委員会1999）などの環壕集落<sup>ツツボ</sup>が調査されるなど資料は増加しつつあるが、集落全面を調査した例が少なく県下の弥生時代像を描くには至っていない。しかしながら、調査例の増加に伴い弥生時代遺跡の動向のようなものは、論究可能になりつつあると思われる。

宮崎平野部で確認できている弥生時代前期の遺跡は、甕棺墓が出土している著名な宮崎市権遺跡（日本考古学協会1960）や板付Ⅱ式併行期の土器が表採された新富町今別府遺跡など日向灘沿いのいくつかが知られている。砂堆上の調査事例が少なく、はっきりしたことはいえないが、この時期の水田経営は砂堆の後背湿地を利用したものが予想される（鈴木重治1985）。集落自体もこれらの砂堆上に展開する可能性が高いだろう。中期になると、新富町新田原遺跡、宮崎市学園都市遺跡群の堂地東遺跡などのように台地上に<sup>ツツボ</sup>営まれる集落が増えてくる。この時期、西都市松本原遺跡、新富町鐘遺跡、宮崎市下郷遺跡<sup>(1)</sup>、国富町塚原遺跡<sup>(2)</sup>など環壕を有する集落<sup>(3)</sup>が営まれるようになる。これらの遺跡の内容は必ずしも明確ではないが、後に古墳群を展開する台地上にこれらの環壕集落が営まれる事実は興味深い。

後期にはいと、遺跡数は急激に増える。都農町新別府下原遺跡、高鍋町大戸ノ口第2遺跡、新富町銀代ヶ池遺跡、宮崎市熊野原遺跡など台地上の遺跡が主であるが、一部、沖積地上の集落も確認されている。沖積地は調査数自体が少なく実態が把握しがたいが、この時期、沖積地上、台地上を問わず集落が展開された可能性があり、急激な人口増加の結果であるといえるかもしれない。この時期の宮崎平野部における人口増加の要因をとらえることは、次に日向の首長たちが100mを越えるような大型の前方後円墳を多数築像できたその背景を知る重要な鍵となるだろう。

今回行った志戸平遺跡の調査では、洪水砂の中から縄文晩期から古墳時代前期までの土器がまとめて確認できた。土器にの量、器表の摩擦があまりないなどの点から、ごく近辺から洪水により流されパッキングされた状況であると思われる。また、土器とともに、なすび形木製品や椀<sup>ハシ</sup>など稲作を連想させる木製品も出土している。弥生時代を通じ鬼付女川流域の沖積地が重要な稲作地帯のひとつであったことは想像に難くない。このような豊富な生産基盤こそが、鉄器を大量副葬した川床遺跡の周溝墓群や後の時代に新田原台地上に展開する古墳群の造営を支えるバックボーンとなっただけではないだろうか。

- 註1) 下郷遺跡の内側の環壕からは、前期末頃の土器が遺構に伴う状態で出土しているが、報告書の記述では確定しづらい。全体的な土器の傾向としては、中期末から後期にかけてのものが主体を示すようである（宮崎市教育委員会1999）。
- 2) 塚原遺跡では1997年の東九州自動車関連の調査で弥生前期まで遡りうる遺物を伴った土坑が確認できているが、国富町が調査を行った環壕内部の集落は、中期から後期にかけてのものが主体を成すようである（国富町教育委員会1995）。
- なお、塚原遺跡の東九州自動車関連の報告については、今年度刊行される予定である。
- 3) 本来、「環壕」とは集落を囲う壕という意味で使うべきであるが、集落全域を調査事例が少なく、検出された壕が集落を囲うものであるかどうか分からないものが多い。ここでは、集落のそばで検出された壕を環壕とよぶ。



第1図 志戸平遺跡・頭田遺跡および周辺遺跡分布図 (1:25000)

1. 志戸平遺跡 2. 頭田遺跡 3. 風早遺跡 4. 城ノ下遺跡 5. 鬼付女西遺跡 6. 柳原遺跡 7. 圓田遺跡
8. 川床遺跡 9. 上新開遺跡 10. 勸大寺遺跡 11. 一丁田遺跡 12. 新田原遺跡 13. 藤山迫遺跡 14. 八幡上遺跡
15. 山之坊上遺跡 16. 石船古墳群 17. 山之坊古墳群 18. 下谷川遺跡 19. 湯之宮遺跡 20. 丸尾・平伊倉遺跡
21. 南原遺跡 22. 坂之上遺跡 23. 新田城跡 24. 竹山城跡 25. 塚原古墳群 26. 富田上ノ城跡 27. 北田地区遺跡
28. 上江新山遺跡 29. 南高鍋新山遺跡 30. 弁掛・中永牟田遺跡 31. 毛作遺跡 32. 西永迫遺跡 33. 新山遺跡
34. 小湊遺跡 35. 西牧遺跡 36. 藤掛遺跡 37. 上日麗遺跡 38. 上岡遺跡 39. 曾遺跡 40. 富田下ノ城跡
41. 下屋敷遺跡 42. 富田1号墳 43. 越田遺跡 44. 今別府遺跡 45. 祝畑遺跡 46. 後田遺跡 47. 隠山遺跡
48. 宮ノ迫遺跡 49. 古城遺跡 50. 坂ノ下遺跡 51. 山田遺跡 52. 叶迫遺跡 53. 福城寺遺跡 54. 佐賀利遺跡
55. 新馬場遺跡 56. 馬場遺跡 57. 坂本迫遺跡 58. 田淵迫遺跡 59. 上平田遺跡 60. 期ノ丸遺跡 61. 井手下遺跡
62. 田ノ上遺跡 63. 天神遺跡 64. 広瀬村古墳群 65. 南町遺跡 66. 新屋敷遺跡 67. 七曲遺跡 68. 福島川原遺跡
69. 原遺跡 70. 奈良木遺跡 71. 平松遺跡 72. 瀧ノ瀬遺跡

## 第Ⅱ章 志戸平遺跡の調査

### 第1節 調査の概要

志戸平遺跡は鬼付女川の中流域の、標高約7m前後の狭小な沖積地に立地する。当遺跡は平成3年度に1次および2次調査が行われており、1次調査時に鬼付女川の旧流路が確認できている。

今回の調査では、調査区を横断する旧流路内の洪水砂の中から、縄文晩期から古墳時代にかけての遺物が多量に出土している。また遺物にはあまり摩耗していないものも多く確認でき、ごく近辺に該期の集落が展開する可能性は高い。

調査は開始時にすでに遺跡内に鬼付女川の新流路が設置されており、調査は新流路の両岸を行った。調査区は、各岸ごとにA～D区とした(第2図参照)。

まず、重機により表土を掘削し、そこから人力により検出面まで掘削した。A・D区では検出面で精査を行ったところ、鬼付女川の旧流路であると思われる洪水砂の中から大量の遺物が出土した。調査期間が限られていたため、洪水砂の中の遺物は50cmのグリッドを切り、取り上げを行った(第4図)。

### 第2節 層序(第3図)

層序は、16層に分層を行った。I層からⅣ層までは遺物の出土は見えていない。Ⅴ層、Ⅺ層、Ⅻ層で植物遺体が確認できている。遺物が出土したのは、Ⅻ層の洪水砂のなかで、標高4.5mから5mの間に集中して出土している。Ⅻ層以外の土質は、おもに粗砂からシルトであり、一部粘土を含み、部分的にラミナ状の堆積も確認できる。旧状は湿地で部分的には流れもあったようである。

今回の調査では植物珪酸体分析を行っていないが、堆積はほぼ水平で、土層断面の観察からは、畦畔や水田面を確認することはできなかった。

### 第3節 遺物

志戸平遺跡では洪水砂の中から多くの遺物が出土した。ここでは出土した遺物のうち土器類を以下のように分類した。

#### 1. 縄文土器(第5図1～3)

若干の縄文土器が出土している。全て小片で、時期は後期から晩期にかけてのものである。

#### 2. 弥生土器・土師器

##### 鉢(第5図4～第6図46)

鉢を以下のように分類した。

##### A. 椀状で口が広く浅いもの(第5図4～14)

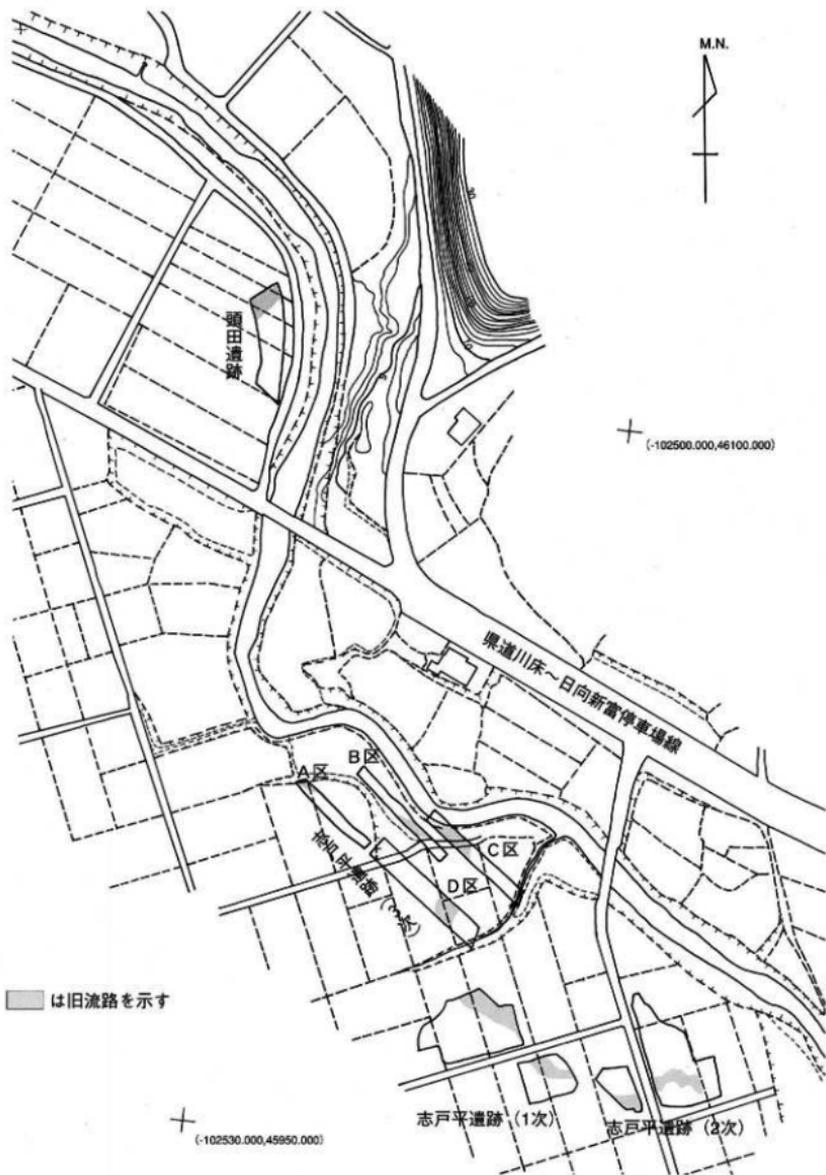
4から9は口縁部が外側に大きく屈曲するもの。10から14は湾曲した体部からそのまま口縁部を成すものである。

##### B. カップ状の口が狭く深いもの(第5図15～24)

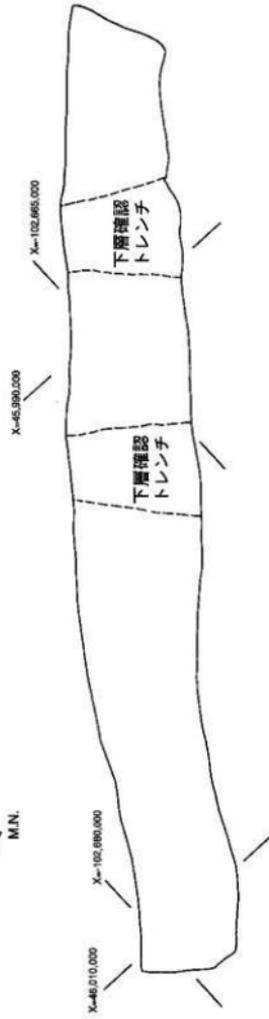
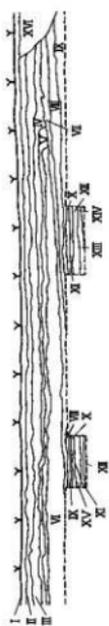
15から19は、胴部が湾曲し口縁部に向かいすはまっていくもの。20から24は胴部から口縁部に向かって直線的に広がっていくものである。24は、口縁部下に半竹管文がめぐる。

##### C. 脚台付鉢(第6図25～29)

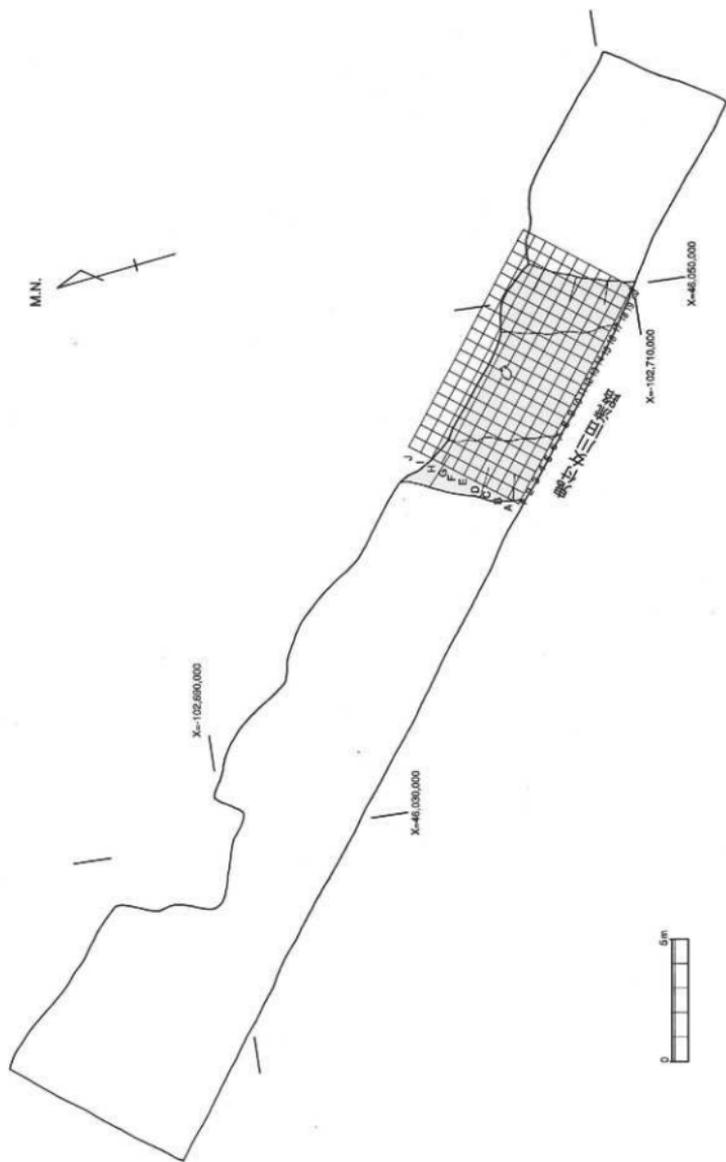
25・26は、大型のもの、27から29は小型のものである。25は胴部が内湾する。26は、口縁部に向かって直線的に開いていく。小型のものは、すべて胴部が内湾するものである。



第2図 志戸平遺跡および頭田遺跡調査区位置図 (1:2,000)



第3図 志戸平遺跡(3次)A区全体図および土層断面(1:200)



第4図 志戸平通跡(3次)D区全体図(1:200)

底部のみの出土のもの

- a. 上げ底のもの（第6図30から40）  
上げ底のものは、深いもの（30から34）と浅いもの（35から40）にわかれる。
- b. 平底のもの（第6図41から46）  
46は、底部に機能不明の穿孔をもつ。

甕（第6図47～第13図）

器面調整から以下のように分類する。

- A. タタキ痕を残さないもの
- B. タタキ痕を残すもの

甕の形態を以下のように分類する。

- a. 胴部が屈曲し、突帯状を成すもの
- b. 口縁端部から体部にかけて、1から数条の突帯をもつもの
- c. 突帯をもたないもの

口縁部から胴部の形態を以下のように分類する。

- I. 頸部を形成せずに、胴部に達するもの
- II. 頸部をもち、口縁部径が胴部最大径を上まわらないもの
- III. 頸部をもち、口縁部径が胴部最大径とほぼ同じもの
- IV. 頸部をもち、口縁部径が胴部最大径を上まわるもの

底部の形態を以下のように分類する。

- i. 高台状の上げ底のもの
- ii. 高台状の平底のもの
- iii. 平底のもの

A a = 47

志戸平遺跡で1点のみ出土している。

A b = 48～60

A b Iとなるものが48から53である。54、55は下城系の甕である。

A b IIは存在しない。56から58はA b III、59、60はA b IVになる。

A c = 61～121

Ac Iは存在しない。61から73はAc II、74から100はAc III、101から121はAc IVとなる。

122から129は、A類のうちこの分類にそぐわないものである。122は頸部で大きく屈曲し、口縁端部にシャープな稜をもつ。123は短く屈曲する口縁部をもち、内面に稜をもつ。125、126はにぶい頸部をもち、口縁部に達する。124は、口縁部がわずかに屈曲する。布留系の土器に似た形態を成すが、表面調整にミガキを施している。127、129は突帯をもたないが、頸部に刻み目を施すもの、128は口縁部に二条の刻み目突帯をもつが大きく外反する。

B a、B bは存在しない。

B c = 130～146

B c I、B c IVは存在しない。130から142までがB c III、143から146がB c IIになる。

口縁部を欠くもの 147～176

口縁部を欠くものは、器面調整と底部形態で分類する。

148から155はA<sub>i</sub>、147と156から165はA<sub>ii</sub>、166から169はA<sub>iii</sub>となる。

170と171はB<sub>i</sub>、172から174はB<sub>ii</sub>、175と176はB<sub>iii</sub>となる。

壺 (第14図～第21図325)

- A. 口縁端部が外反し、頸部下部に沈線が巡るもの (177、178)
- B. 口唇部がT字状に反り返るもの (179)
- C. 口唇部に凹線文が巡るもの (181～184)
- D. 口縁部が強く外反するもの (185、186)
- E. 口縁部が短くかつ強く外反するもの (188～205)
- F. 口縁部が短く直線的に立ち上がるもの (206～216)
- G. 口縁部が直線的に立ち上がる長頸壺 (217～219)
- H. 二重口縁壺 (220～248)

底部の形態を以下のように分類する。

- a. 上げ底のもの (239～256)
- b. 高台状の平底のもの (206・243・257～276・319・323)
- c. 平底のもの (277～284)
- d. 丸底に近いもの (285～293)

胴部を以下のように分類する。

- I. 球胴のもの (199・214・216・244・277～279・288・294～297・318・319・320)
- II. 長胴のもの (201・206・215・243・245・304・321)

H類については、口縁部の文様で、鋸歯文、波状文、無文に分けられる。また、二次口縁部の傾きによっても分類可能である。180、187、247は頸部に突帯をもつ。

298から300と306から309は小型壺である。305は、二重口縁壺と思われるが、非常に薄手で一次口縁部と二次口縁部の接合部分に刻み目をもつ。310は二重口縁壺の二次口縁部に刺突文を施したものの、311は、口縁部に突起をもつ特異な形をしたものである。312から324は線刻をもつものである。312から319は肩部に三条の放射状の線刻をもつもの、320から324はそれ以外の線刻をもつものである。

高坏 (第21図326～第22図351)

坏部を以下のように分類する。

- A. 屈曲部から、口縁部が水平に開くもの (325)
- B. 坏部底面が水平に近いもの (326～330)
- C. 坏部底面が碗状になるもの (333～336)
- D. 坏部底面が不明のもの (331・332)

脚部から裾部にかけての形態により以下のように分類する。

- a. 裾部が漏斗状に広がるもの
- b. 脚部から裾部への変化が不明瞭でラッパ状に開くもの

脚部の穿孔部により以下のように分類する。

- i. 穿孔部が裾部にあるもの
- ii. 穿孔が裾部と脚部の変換部にあるもの
- iii. 穿孔が裾部にあるもの
- iv. 穿孔がないもの

337はaiになる。338と340はa<sup>ii</sup>、342はa<sup>iii</sup>、341はa<sup>iv</sup>である。339については、穿孔部が不明である。

b<sup>i</sup>は存在しない。343から346はb<sup>ii</sup>、347、348、350はb<sup>iii</sup>、349はb<sup>iii</sup>もしくはb<sup>iv</sup>になる。器台（第22図351～第23図363）

351と352は口縁端部がT字状に垂れ下がるもの。353から359は穿孔をもつもので353は脚部に凹線文が施してある。360と361は穿孔をもたない。362と363は大きく広がる裾部をもたないものである。その他の土器（第23図364～373・377～379）

364は杓子形土器の柄部である。365は刺突文と沈線が施された土器の胴部である。366から373はミニチュア土器、377と378は須恵器の甕の胴部である。379は土師器の坏である。底部はヘラ切り難しとおもわれるが、摩擦が激しく判然としない。

### 3. 木製品

ナスビ形木製品（曲柄平鍬）（第23図374）

D区の洪水砂の中から出土した木製品である。現存長43.8cm、最大幅11.2cmをはかる。先端を欠損しているが、形態から奈良国立文化財研究所分類の曲柄平鍬DⅡ（上原真人1993）にあたる。『木器集成図録』（上原1993）によると同形態のナスビ形木製品は、「弥生V期」から6世紀に至るまで存在している。今回の調査で出土したものは、他の遺物から考えて弥生時代終末から古墳時代の初頭にかけてのものである可能性が高い。

竪杵（第23図375）

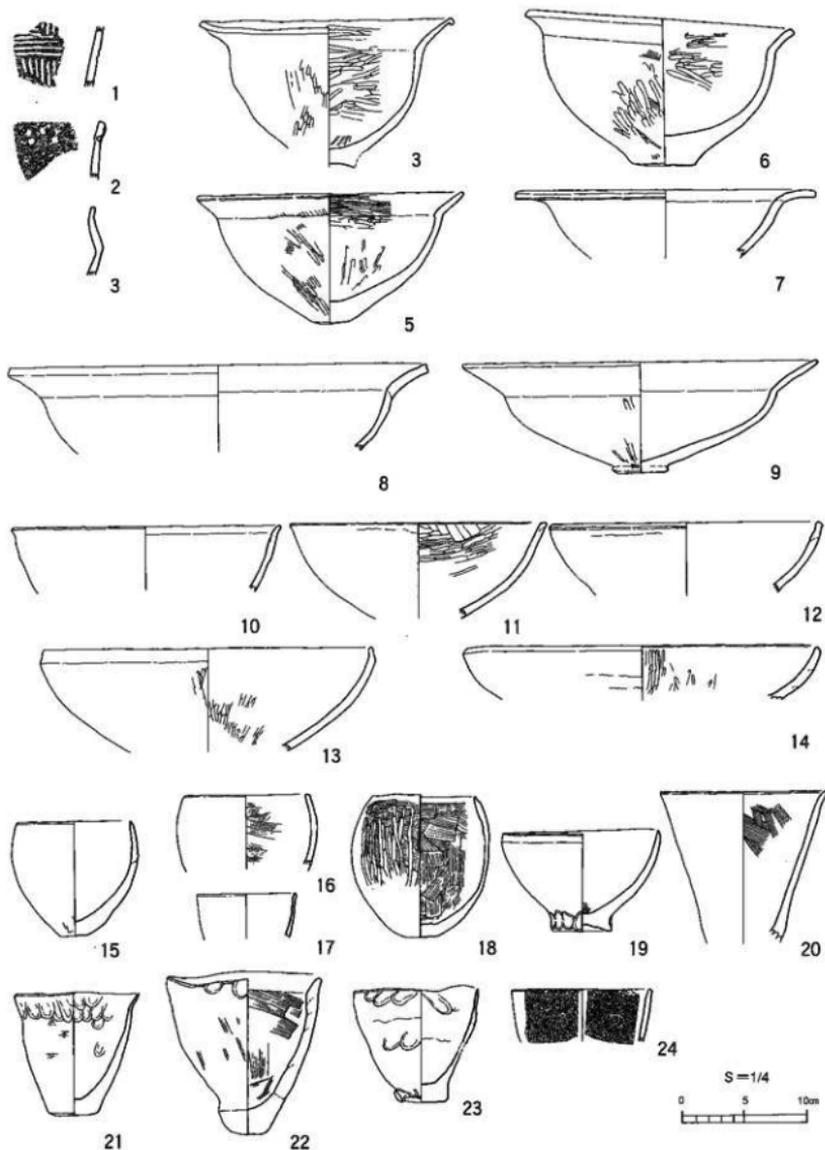
D区の洪水砂中から出土した木製品である。搦部の片側を欠損している。『木器集成図録』のC類にあたる。現存長26.4cm、搦部径6.0cmをはかる。弥生時代終末から古墳時代初頭にかけてのものと予想される。

### 4. 磨石（第23図376）

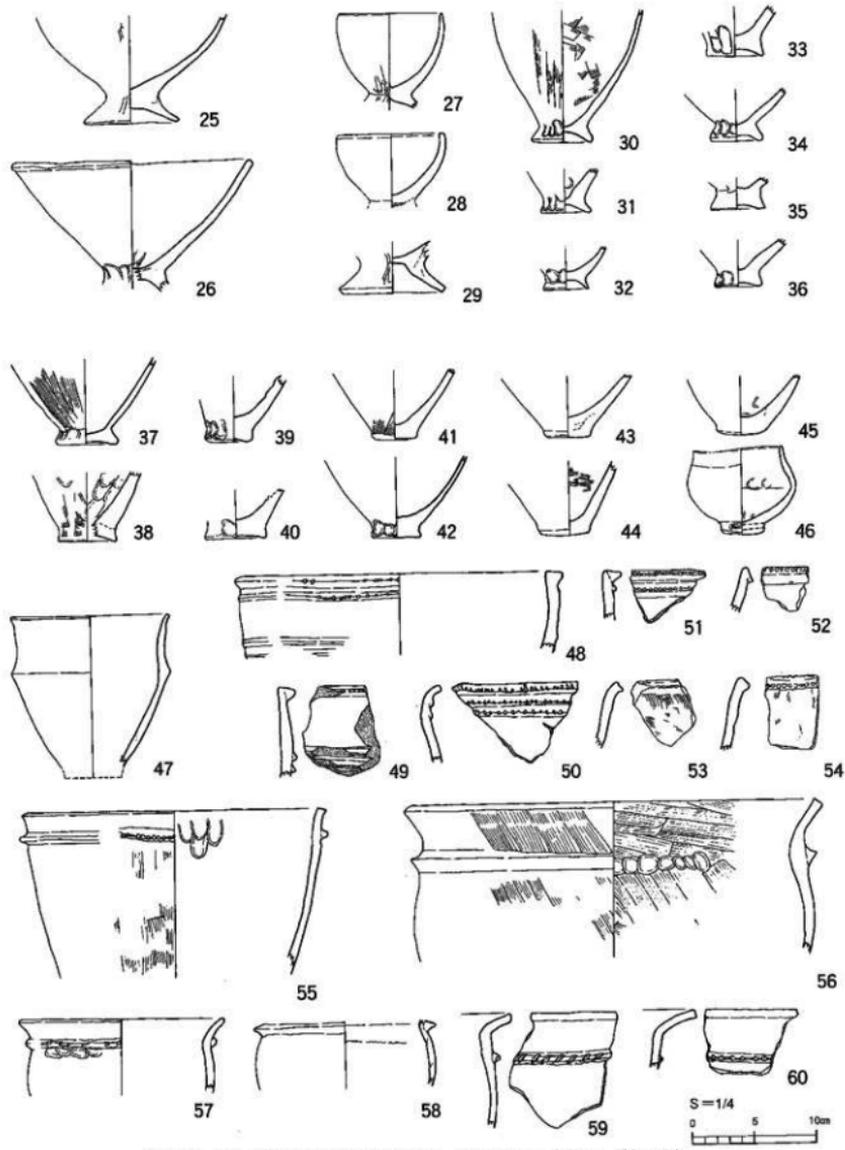
376は磨石である。長径11.6cm、短径13.4cmをはかる。

## 第4節 小結

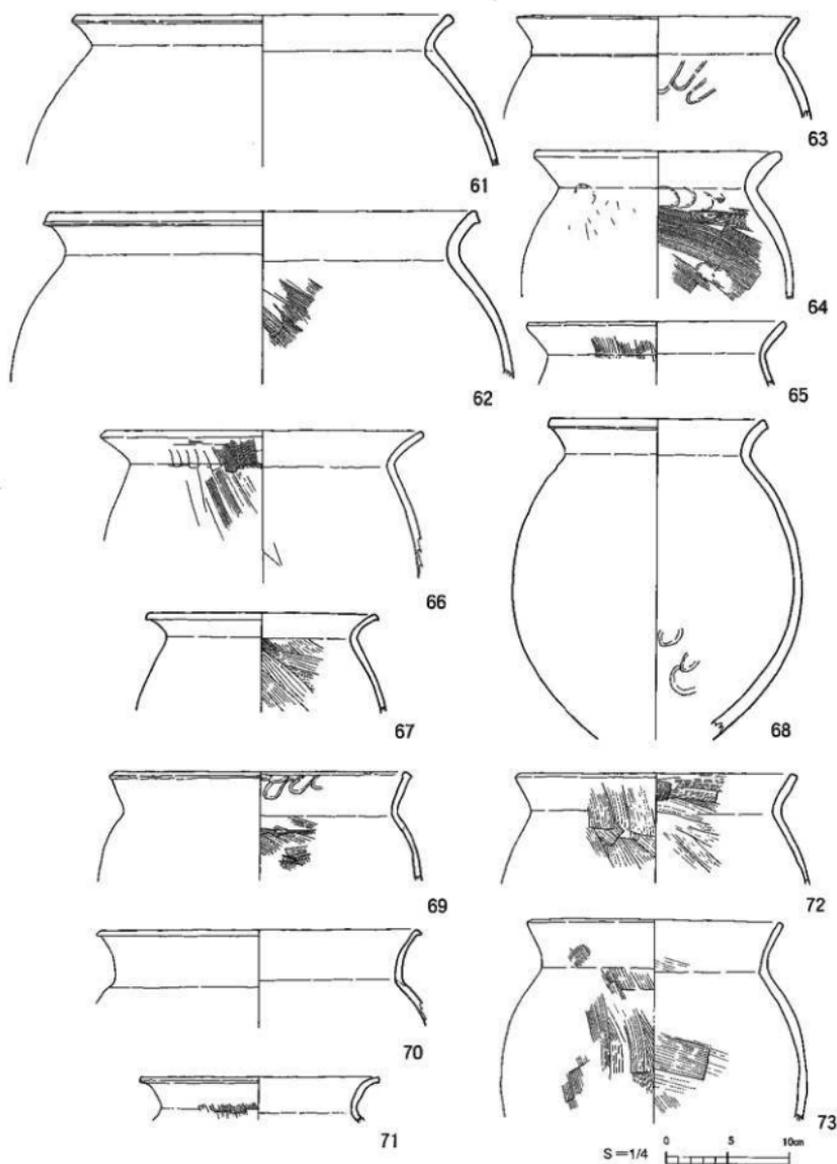
志戸平遺跡では、洪水砂のなから多量の土器が出土した。遺物の主体の時期は縄文時代晩期（弥生時代早期）から古墳時代にかけてのもので、特に弥生時代中期から後期のものが目立った。出土した遺物には、あまり摩擦していない遺存状態の良好なものも多く、ごく近辺に弥生時代をおとして営まれた集落が存在することはほぼ確実である。また、板付Ⅱ式併行と考えられる土器が2点確認できており、県下の数少ない弥生前期の資料に加わることとなった。残念ながら洪水砂の中の一括資料であり、当時の土器様式などを確認するのは不可能に近いが、弥生前期の遺跡の分布がかねてから指摘されていたような砂堆の後背湿地を利用したものだけではなく、小河川沿いや谷部の湧水を利用した水田経営が行われていた可能性を示す資料のひとつにはなりうるだろう。これらの点については、今後の調査と研究の進展に期待したい。



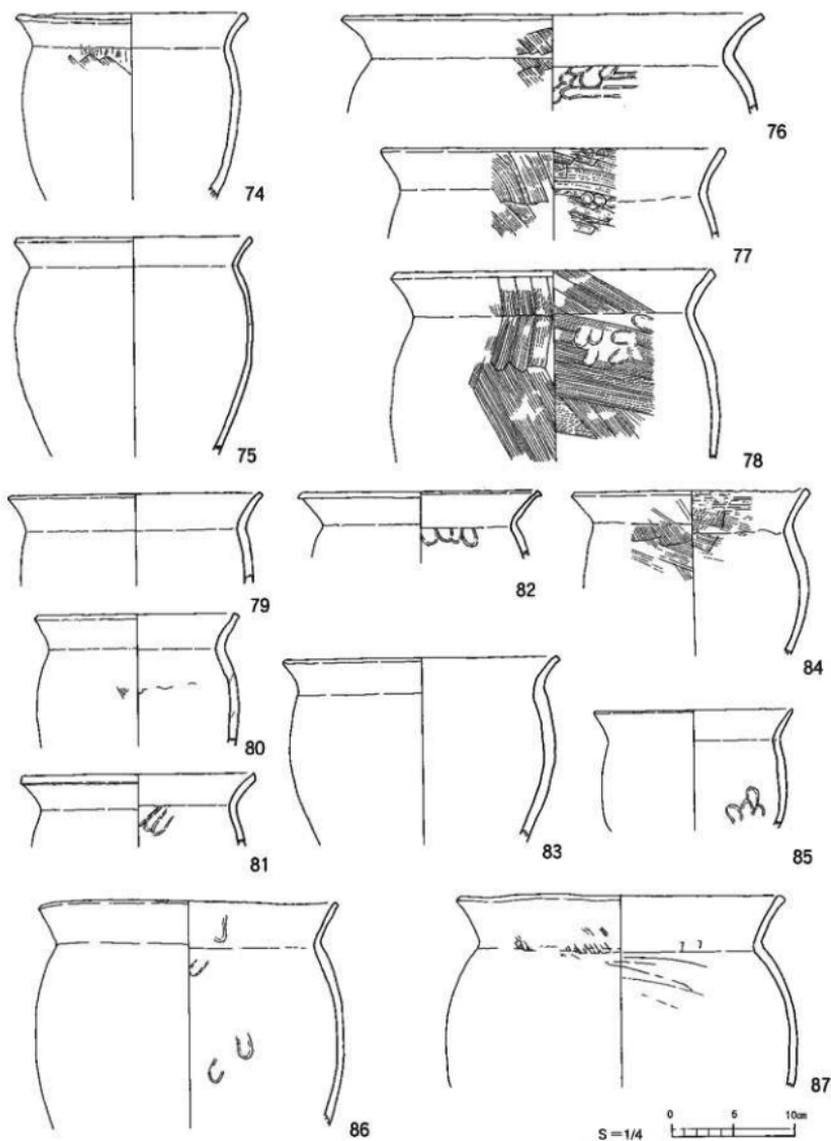
第5図 志戸平遺跡出土遺物実測図 縄文土器・弥生土器(鉢)



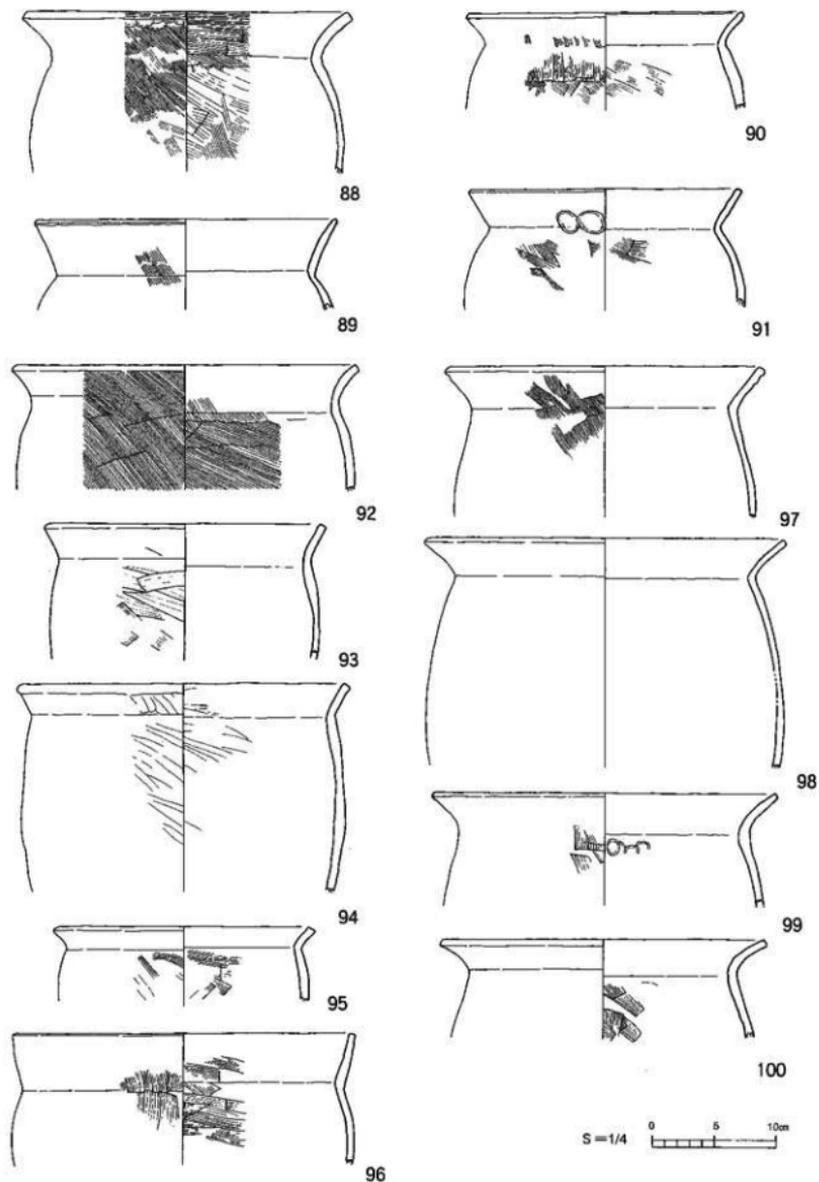
第6図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器（鉢・甕）



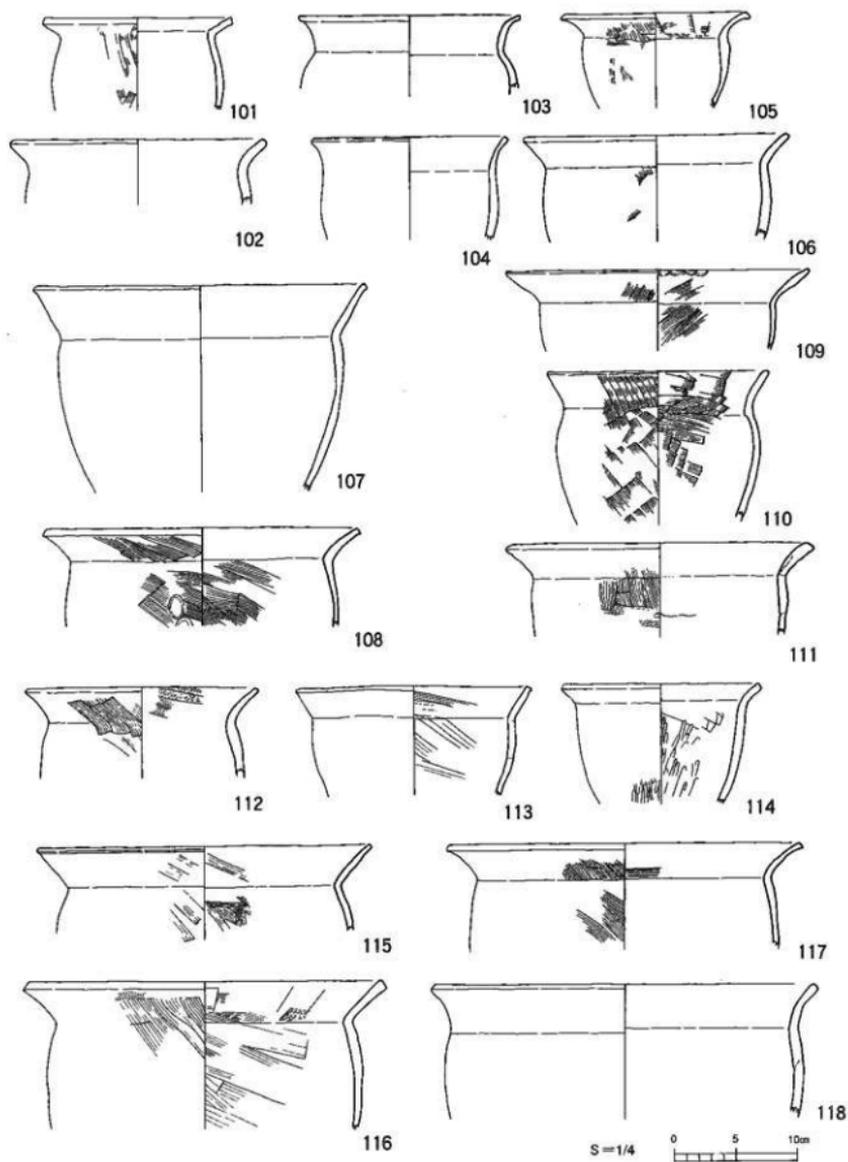
第7図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(甕)



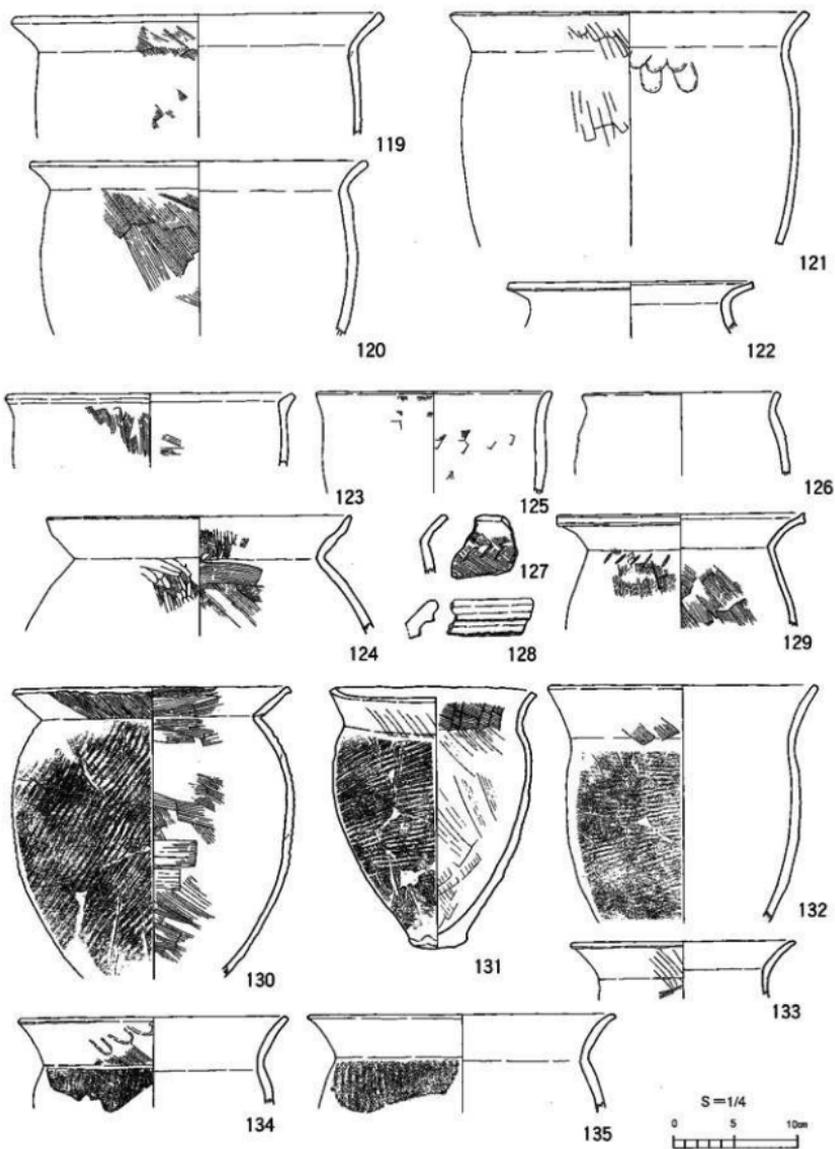
第8図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(甕)



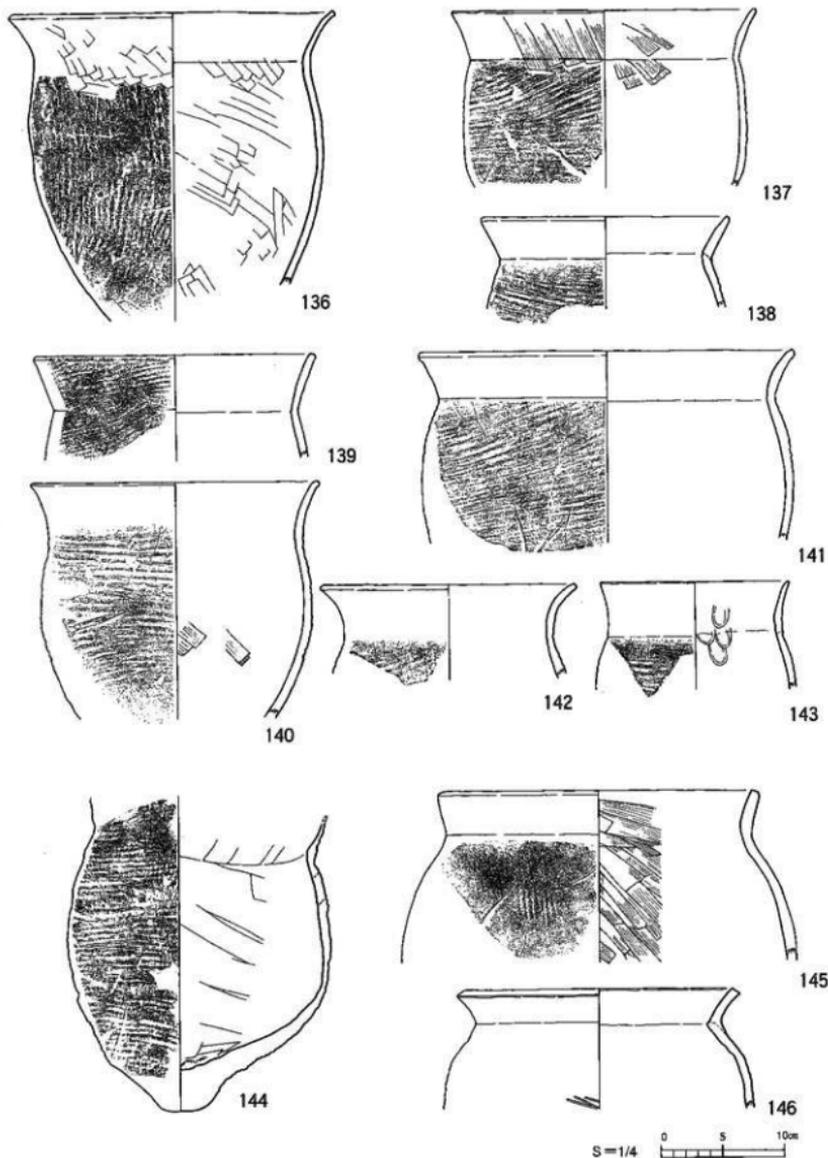
第9図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(壺)



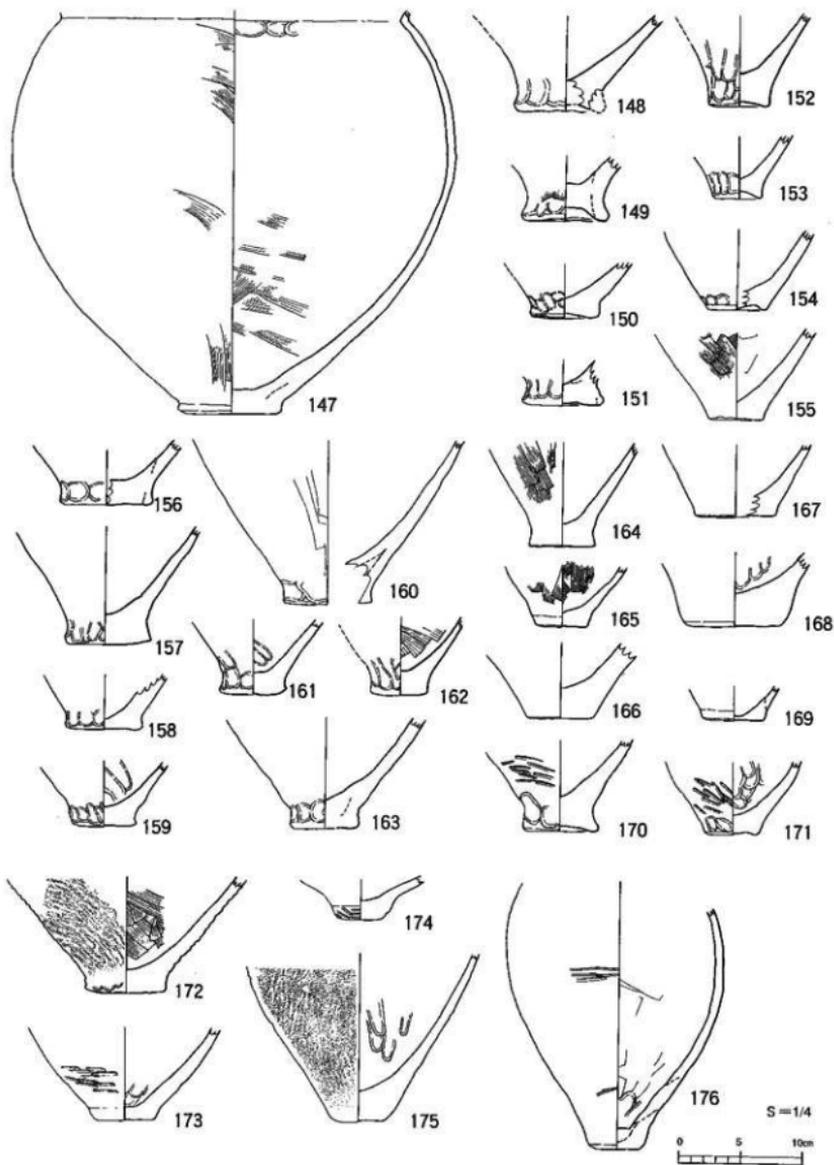
第10図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(甕)



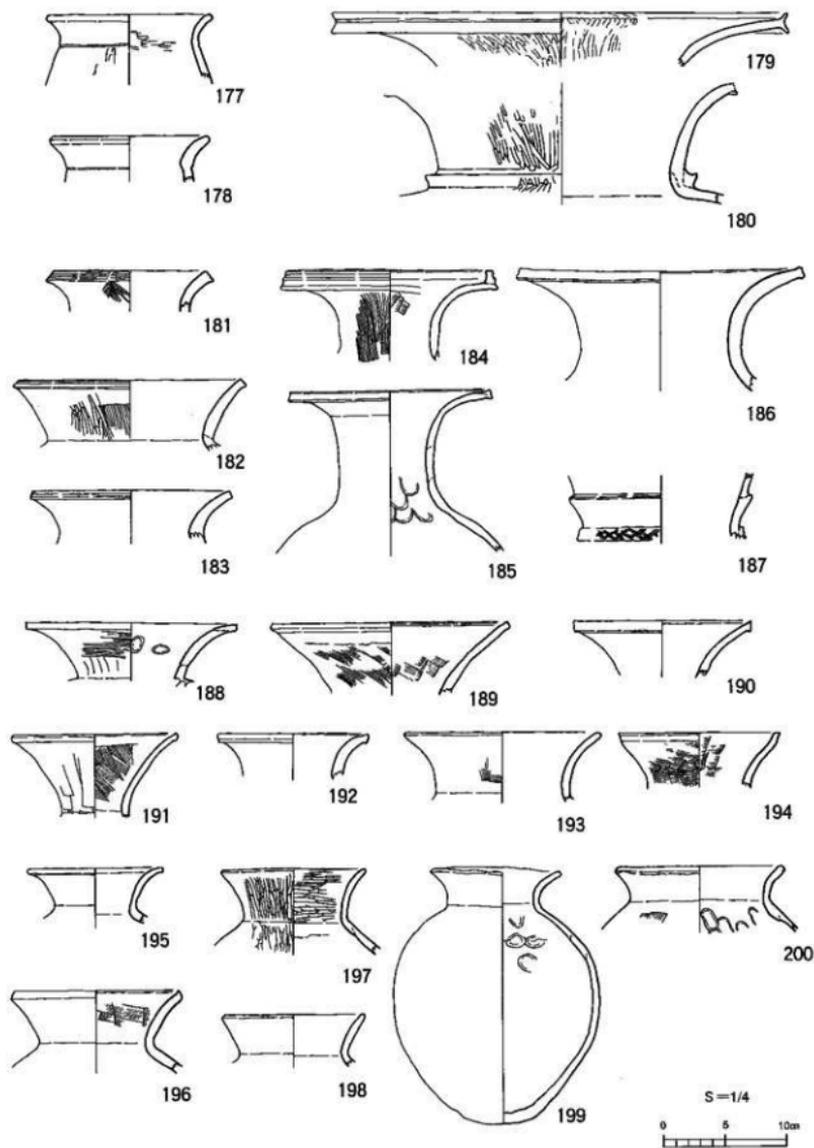
第11図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(甕)



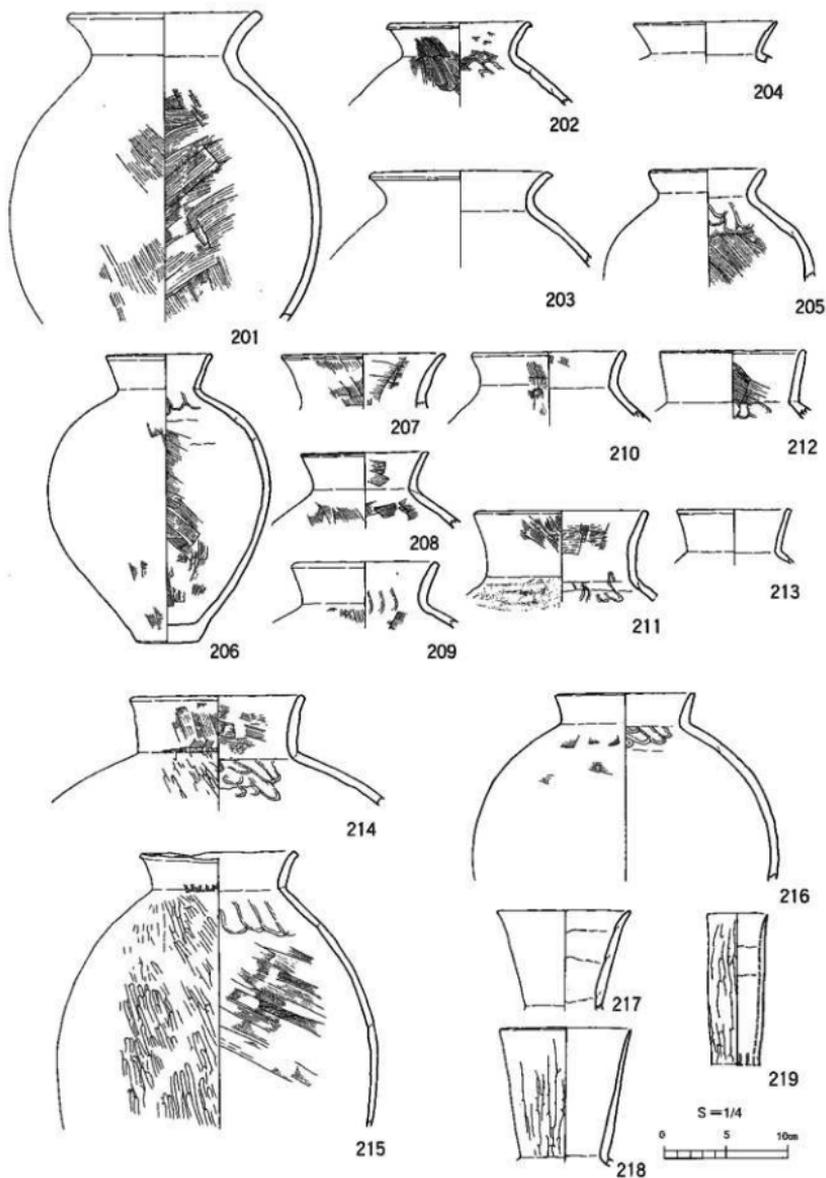
第12図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(瓿)



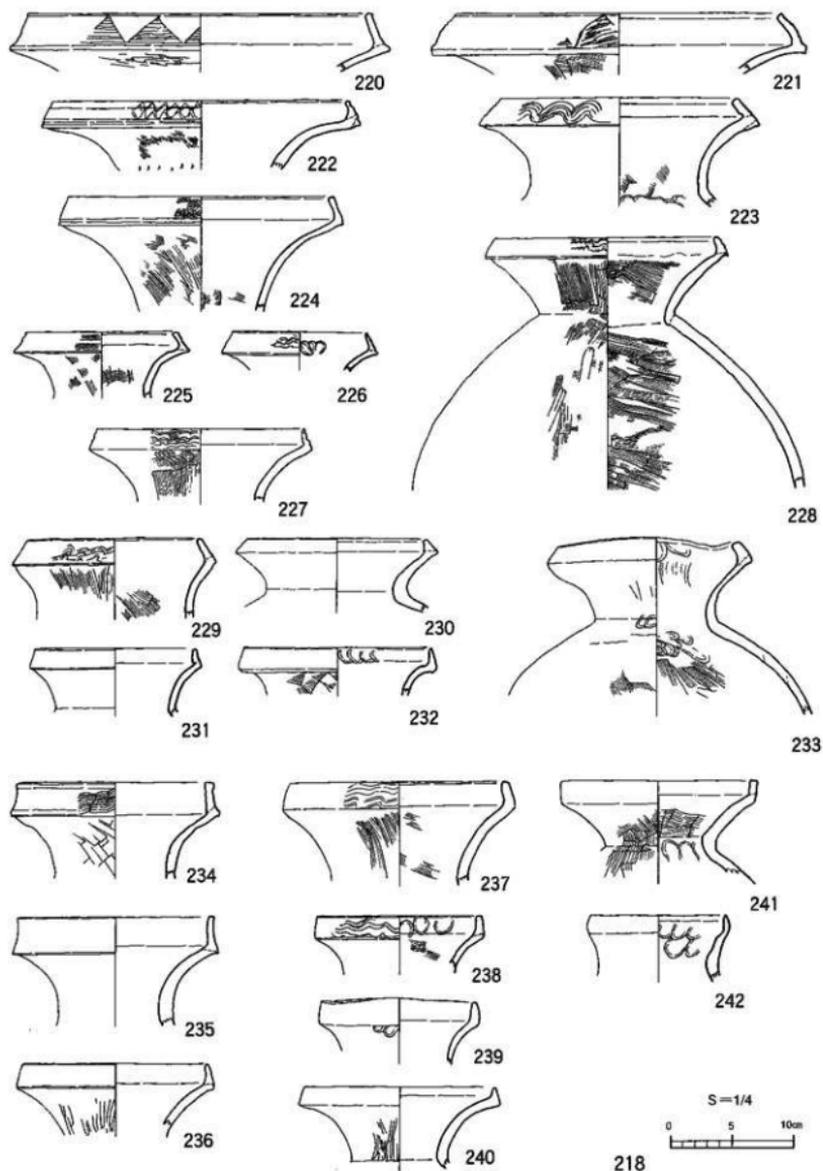
第13圖 志戸平遺跡出土遺物実測圖 弥生土器・土師器（甕）



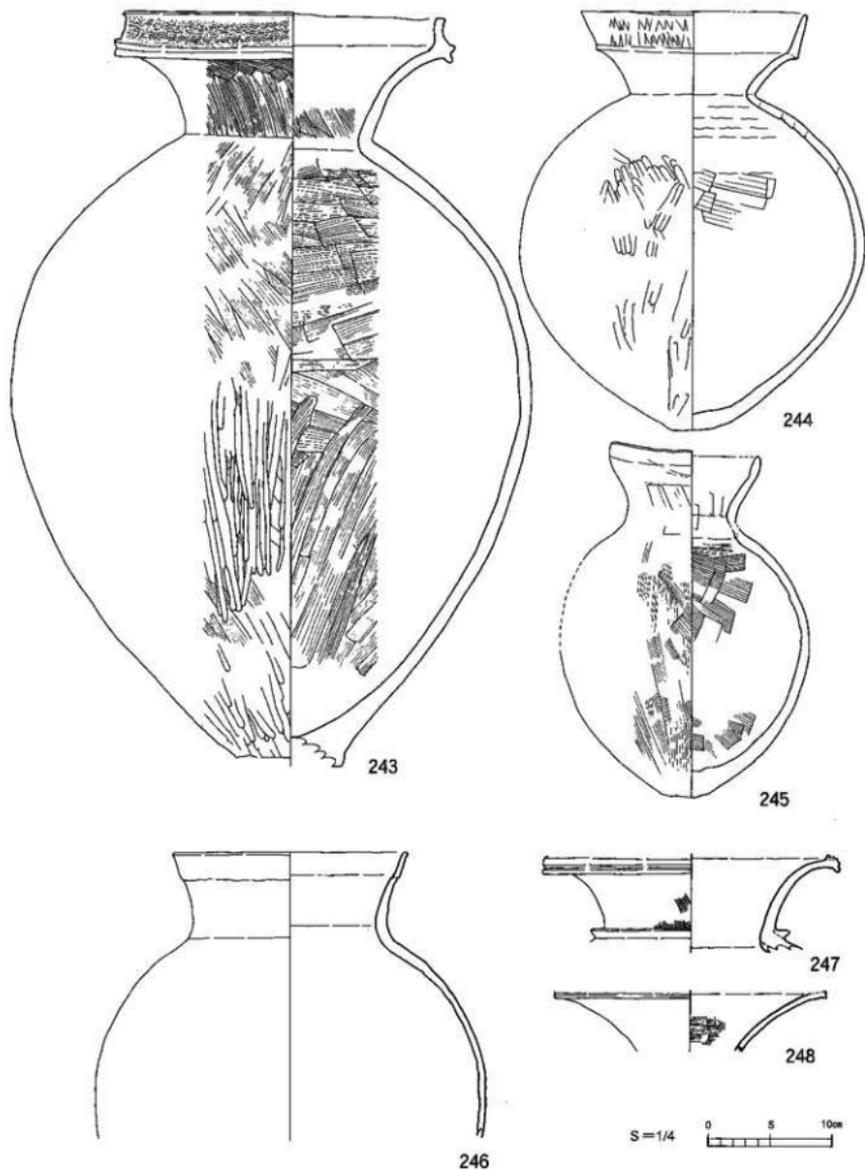
第14図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(壺)



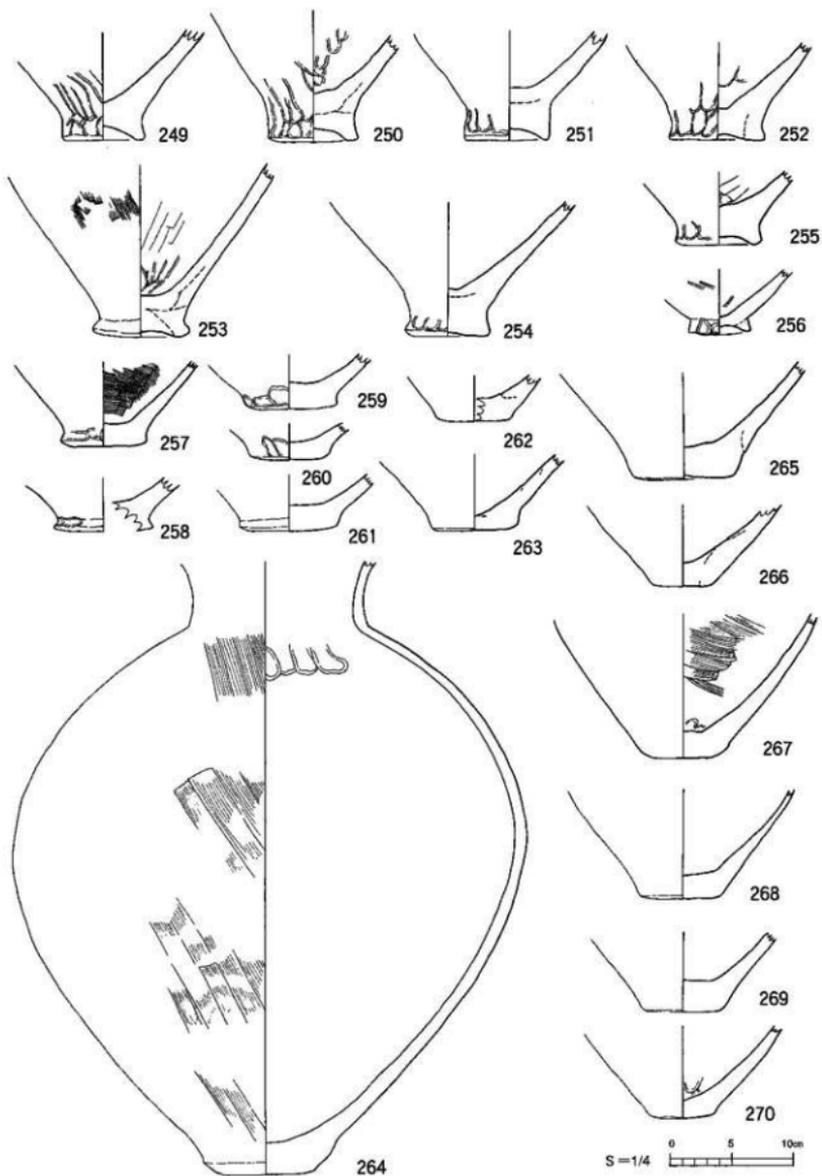
第15図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(壺)



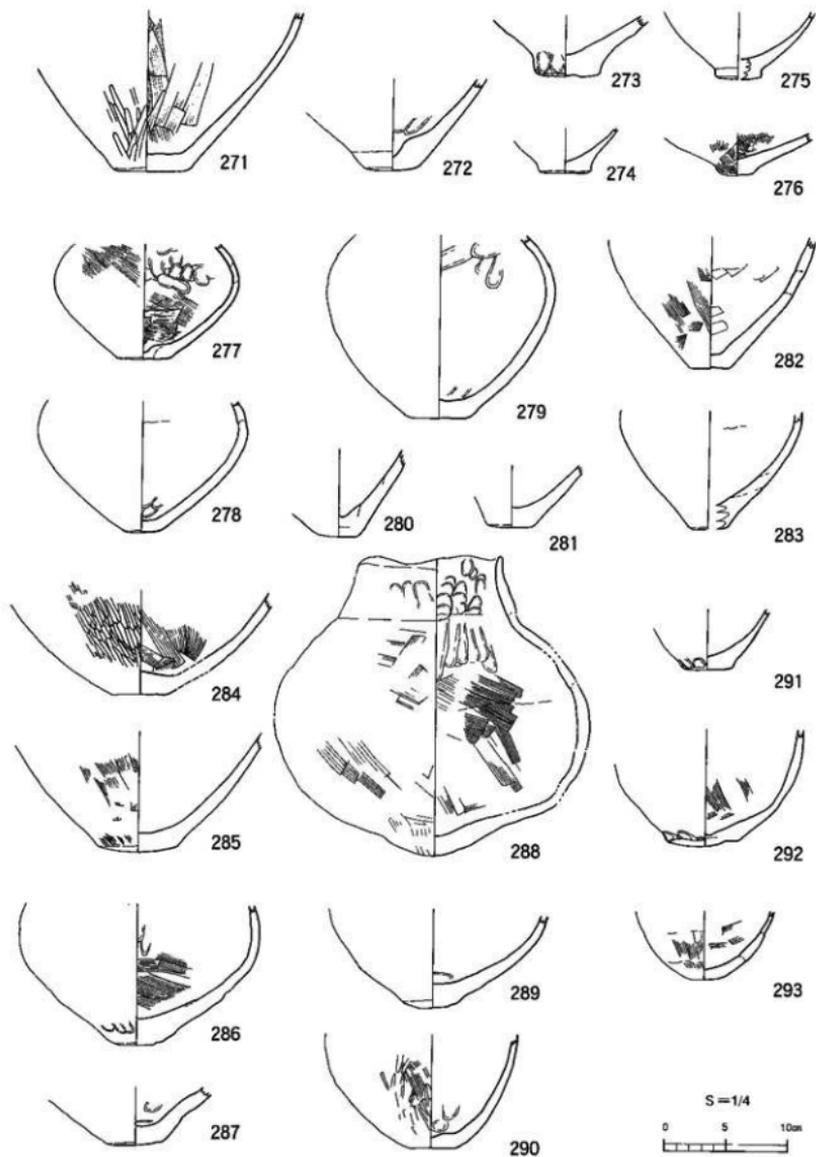
第16図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(壺)



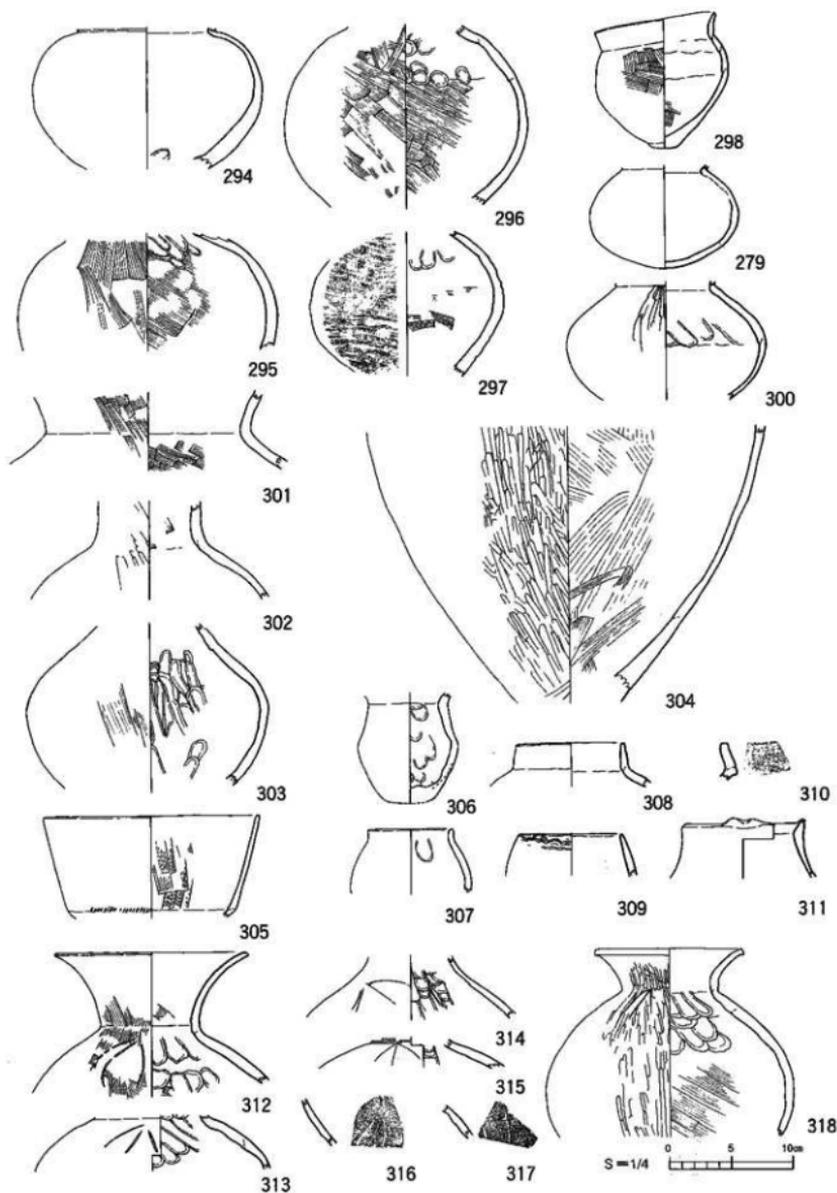
第17図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(壺)



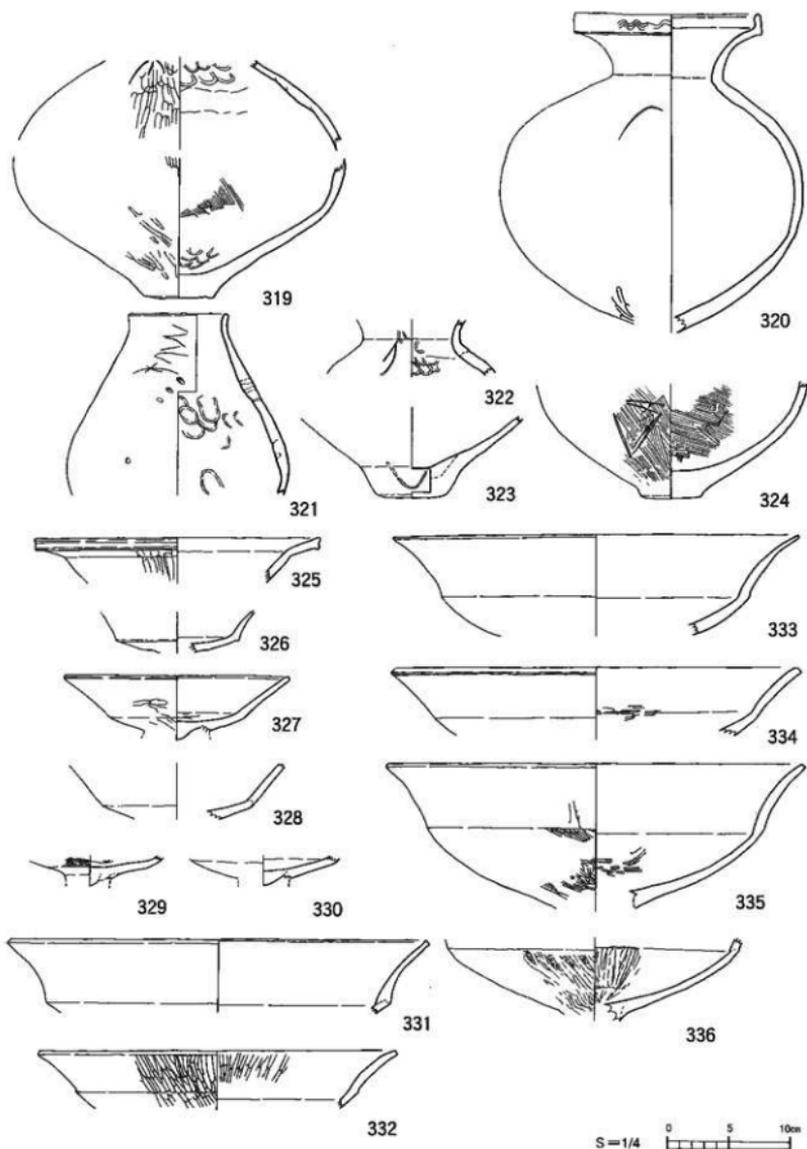
第18图 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(壺)



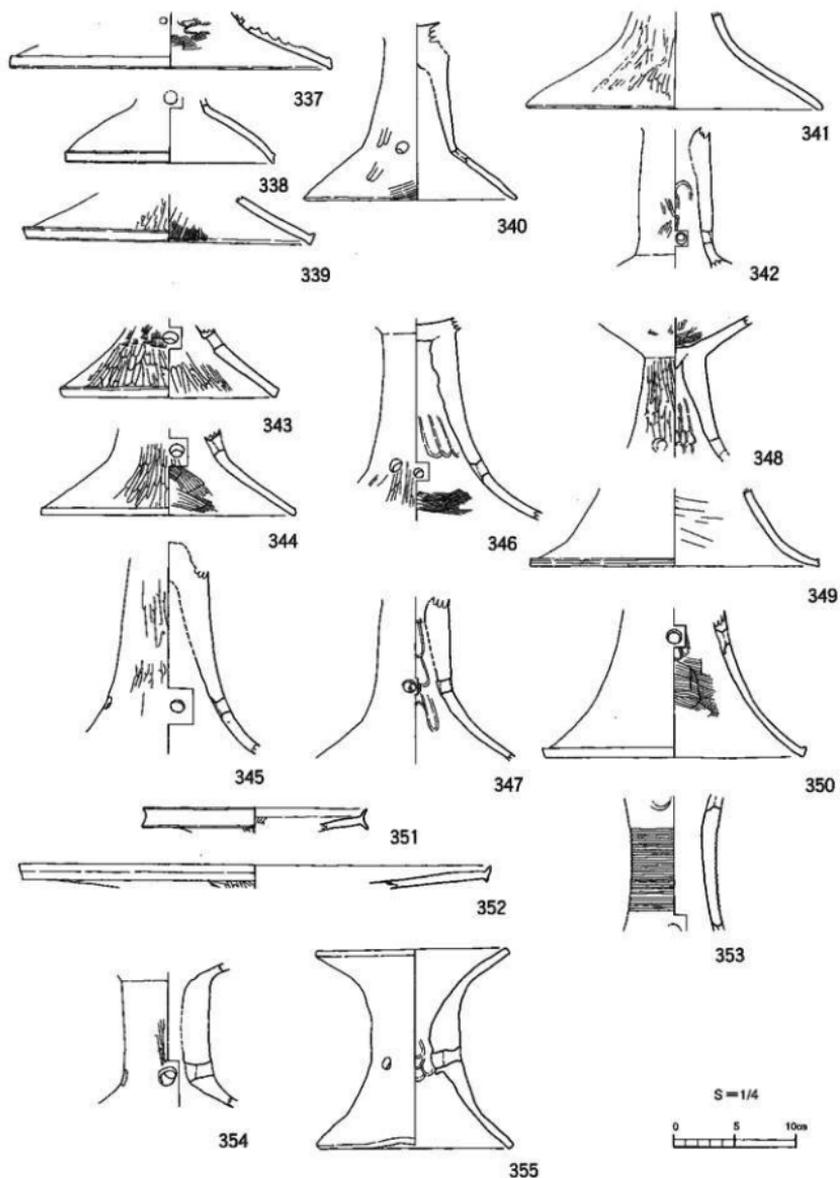
第19図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(壺)



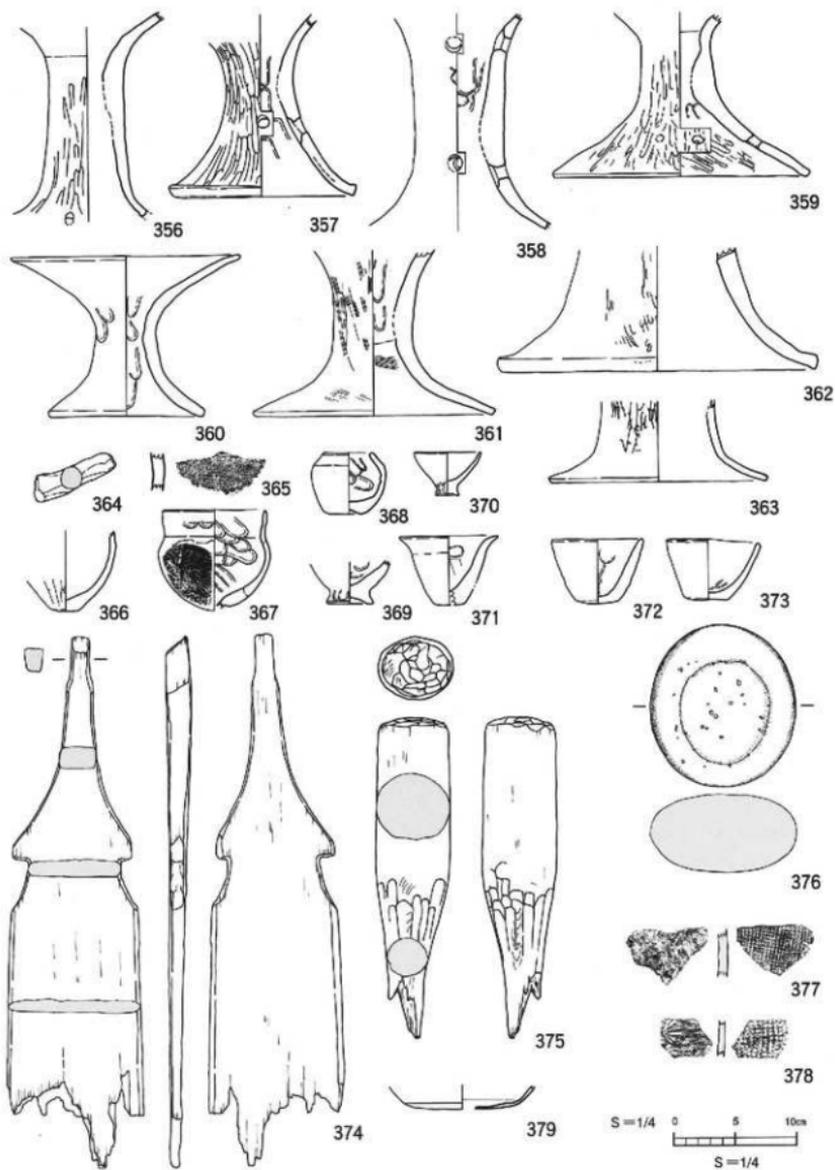
第20図 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器(壺)



第21图 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器（壺・高坏）



第 22 图 志戸平遺跡出土遺物実測図 弥生土器・土師器（高坏・器台）



第23図 志戸平遺跡出土遺物実測図

第1表 志戸平遺跡出土遺物観察表

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量 (cm)		調整		色調		胎土の特徴	備考		
				口徑	底径	器高	外面	内面	外面			内面	
1	縄文土器	鉢・口縁部	B区B							黒灰 黄灰	3mm以下の褐色・灰色の砂粒を含む		
2	縄文土器	深鉢・胴部	D区				ナデ	ナデ	こいぬ	こいぬ	1mm以下の白色砂粒・褐色砂粒を含む		
3	縄文土器	鉢・口縁部	D区				ミガキ?	ミガキ	こいぬ	黒灰	2mm以下の白色・褐色・灰色の砂粒を含む		
4	弥生土器	鉢・口縁・胴部	D区D'8/B9/D7	20.0				ミガキ	こいぬ	こいぬ	3mm以下の灰白・褐色の砂粒を含む		
5	弥生土器	鉢・口縁・底部	D区A10	21.2	3.1	10.5	ミガキ	ハケメ	こいぬ	黄	4mm以下の灰・白・褐色の砂粒を含む		
6	弥生土器	鉢・口縁・底部	D区B'7/B'9/C'6	21.0	5.2	11.9	ミガキ	ミガキ	灰	白	灰	3mm以下の灰・褐色の砂粒を含む	
7	弥生土器	鉢・口縁・胴部	D区	24.3			ナデ	ナデ	こいぬ	こいぬ	2mm以下の灰・黄・褐色の砂粒を含む		
8	弥生土器	鉢・口縁・胴部	D区	33.6			ナデ	ナデ	こいぬ	こいぬ	5mm以下の灰白・赤・褐色の砂粒を含む		
9	弥生土器	鉢・口縁・底部	D区	28.6	4.5	9.0	ミガキ	ナデ	灰	白	灰	2.5mm以下の赤・灰・褐色の砂粒を含む	
10	弥生土器	鉢・口縁・胴部	D区	21.4			ナデ	ナデ	浅黄	黄	灰	1.5mm以下の灰白・赤・黒・褐色の砂粒を含む	
11	弥生土器	鉢・口縁・胴部	B区	20.7			ナデ	ミガキ	灰	白	黄	2mm以下の灰・赤・黒・褐色の砂粒を含む	
12	弥生土器	鉢・口縁・胴部	D区	22.1			ナデ	ナデ	灰黄	黄	灰	3mm以下の灰白・赤・褐色の砂粒を含む	
13	弥生土器	鉢・口縁・胴部	D区A'7/D'9	26.3			ミガキ	ミガキ	こいぬ	こいぬ	黒灰	2mm以下の灰白・褐色の砂粒を含む	
14	弥生土器	鉢・口縁・胴部	D区A'7/A'8	28.3			ナデ	ミガキ	黄	黒	こいぬ	3mm以下の灰白・褐色の砂粒を含む	
15	弥生土器	鉢・口縁・底部	D区	9.1	2.3	9.4	不明	不明	灰	黄	こいぬ	4mm以下の灰色の砂粒を含む	
16	弥生土器	鉢・口縁・胴部	D区	9.9			ナデ	ハケメ	灰	黄	黄	1mm以下の灰色の砂粒を含む	
17	弥生土器	鉢・口縁・胴部	D区	7.8			ナデ	ナデ	こいぬ	こいぬ	黒灰	1mm以下の灰・褐色の砂粒を含む	
18	弥生土器?	鉢・ほぼ完形	D区	8.1	2.7	11.8	ハケメ	ハケメ	黄	黄	黄	4mm以下の赤・灰・褐色の砂粒を含む	
19	弥生土器	鉢・完形	D区A6	12.5	4.6	8.3	ハケメ?	ハケメ!	こいぬ	黒	黒	3mm以下の灰・褐色の砂粒を含む	
20	弥生土器?	鉢・口縁・胴部	D区A9/A10	13.5			ナデ	ハケメ	黄	灰	灰	1.5mm以下の灰白・黒・褐色の砂粒を含む	
21	弥生土器	鉢・ほぼ完形	D区/B'7	10.1	4.0	10.0	ナデ	スピナ	浅黄	黄	黄	3mm以下の赤・黄・灰色の砂粒を含む	
22	弥生土器	鉢・完形	D区	12.2	3.2	13.3	ナデ	ハケメ	こいぬ	こいぬ	黒灰	6mm以下の灰・黄・赤・乳白色の砂粒を含む	
23	弥生土器	鉢・ほぼ完形	D区	10.1	4.3	9.5	スピナ	ナデ	黄	黄	黄	3mm以下の赤・黒・灰・褐色の砂粒を含む	
24	弥生土器	鉢・口縁部	D区	11.0			ハケメ	ハケメ	こいぬ	こいぬ	黒灰	3mm以下の灰色の砂粒を含む	口縁部に竹管文
25	弥生土器	鉢・胴・底部	D区			7.4	ミガキ	不明	灰	白	こいぬ	3mm以下の灰白・褐色の砂粒を含む	
26	弥生土器	鉢・口縁・胴部	D区	18.8			ナデ	ナデ	こいぬ	こいぬ	黒灰	3mm以下の灰白・赤・褐色の砂粒を含む	
27	弥生土器	鉢・口縁・底部	D区30	8.3			ミガキ	ナデ	こいぬ	黒灰	黄	3mm以下の赤・白・褐色の砂粒を含む	
28	弥生土器	鉢・口縁・底部	DK30	8.5			ナデ	ナデ	灰	黄	こいぬ	1mm以下の灰色の砂粒を含む	
29	弥生土器	鉢・底部	D区	8.0			ミガキ	ナデ	浅黄	黄	黄	3mm以下の灰・白・褐色の砂粒を含む	
30	弥生土器	鉢・胴部・底部	D区	4.9			ハケメ	ハケメ	こいぬ	こいぬ	黒灰	4mm以下の灰色の砂粒を含む	
31	弥生土器	鉢・底部	D区	4.0			ナデ	ナデ	浅黄	黄	黄	3mm以下の赤・白・褐色の砂粒を含む	
32	弥生土器	鉢・底部	D区	3.7			ナデ	ナデ	こいぬ	黒灰	黄	1.5mm以下の白・灰色の砂粒を含む	
33	弥生土器	鉢・底部	D区	4.5			ナデ	ナデ	灰	黄	灰	2mm以下の白・灰・褐色の砂粒を含む	
34	弥生土器	鉢・底部	D区	3.8			ナデ	ナデ	浅黄	黄	黄	3mm以下の赤・白・黒・褐色の砂粒を含む	
35	弥生土器	鉢・底部	D区	4.4			ナデ	ナデ	こいぬ	こいぬ	黒灰	1mm以下の赤・灰色の砂粒を含む	
36	弥生土器	鉢・底部	D区	3.9			ナデ	ナデ	こいぬ	黒灰	黄	1mm以下の赤・灰色の砂粒を含む	
37	弥生土器	鉢・胴部・底部	D区A'5	5.1			ハケメ	不明	浅黄	黄	黄	4mm以下の赤・灰色の砂粒を含む	
38	弥生土器	鉢・底部	D区	3.5			不明	不明	こいぬ	こいぬ	黒灰	4mm以下の白・灰・褐色の砂粒を含む	
39	弥生土器	鉢・底部	D区	4.0			ナデ	ナデ	こいぬ	こいぬ	黒灰	5mm以下の白・黒・灰・褐色の砂粒を含む	
40	弥生土器	鉢・底部	D区A'5	4.7			ナデ	ナデ	こいぬ	こいぬ	黒灰	4mm以下の赤・白・褐色の砂粒を含む	
41	弥生土器	鉢・底部	D区	3.3			ハケメ	ナデ	浅黄	黄	黄	1mm以下の白・黒・灰色の砂粒を含む	
42	弥生土器	鉢・底部	D区	3.7			不明	不明	こいぬ	こいぬ	黒灰	4mm以下の灰色の砂粒を含む	

第2表 志戸平遺跡出土遺物観察表

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法址 (cm)		形状		色調		胎土の特徴	備考	
				口徑	底徑	器高	外面	内面	外面			内面
43	弥生土器	鉢・底部	D区		45		ハケメ	ユビナデ	にぶい	にぶい	3mm以下の黒・灰・褐色の砂粒を含む	
44	弥生土器	鉢・底部	D区B10		39		ナデ	ハケメ	不明	黄 灰	1.5mm以下の白・灰色の砂粒を含む	
45	弥生土器	鉢・底部	D区		35		不明	ユビナデ	灰 白	灰 白	2mm以下の茶・灰色の砂粒を含む	
46	弥生土器	鉢・完形	D区A'5		70	28	ナデ	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	2mm以下の白・黒・褐色の砂粒を含む	
47	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区		130		ナデ	ナデ	にぶい	にぶい	1.5mm以下の灰白・褐色の砂粒を含む	被須系か
48	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区		270	72	ナデ	ナデ	灰黄緑	にぶい	1.5mm以下の白・黒・灰・褐色の砂粒を含む	
49	弥生土器	鉢・口縁～胴部	D区				ナデ	ナデ	にぶい	にぶい	3mm以下の灰色の砂粒を含む	
50	弥生土器	甕・口縁部	D区				ナデ	ナデ	にぶい	にぶい	3mm以下の白・灰・褐色の砂粒を含む	
51	弥生土器	甕・口縁部	D区				ナデ	ナデ	灰黄緑	灰黄緑	3mm以下の茶・白・灰色の砂粒を含む	
52	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区				ナデ	ナデ	黄 灰	灰	2mm以下の白・灰色の砂粒を含む	
53	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区				ハケメ	ナデ	灰 緑	にぶい	2mm以下の白・灰色の砂粒を含む	
54	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区				ハケメ	ナデ	黄 緑	にぶい	2mm以下の茶・白色の砂粒を含む	
55	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区		233		ハケメ	ナデ	灰黄緑	にぶい	4mm以下の茶・黒・白色の砂粒を含む	ド城式系の甕
56	弥生土器	鉢・口縁～胴部	D区B'9		340		ハケメ	ハケメ	にぶい	にぶい	3mm以下の茶・白・灰色の砂粒を含む	
57	弥生土器	甕・口縁～胴部	B区		167		ナデ	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	3mm以下の赤・灰・褐色の砂粒を含む	
58	弥生土器	甕・胴部	D区A7/B1				ナデ	ナデ	灰 白	灰 白	2mm以下の灰・褐色の砂粒を含む	
59	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区				ナデ	ナデ	黄	にぶい	4mm以下の赤・黒・灰・褐色の砂粒を含む	
60	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区				ナデ	ナデ	にぶい	にぶい	2mm以下の赤・黒・白・灰色の砂粒を含む	
61	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区C14		302		ナデ	ナデ	にぶい	にぶい	6mm以下の灰白・橙・白色の砂粒を含む	
62	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区		345		ナデ	ハケメ	淡 灰	灰 白	2mm以下の灰褐色・赤褐色の砂粒を含む	
63	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区		125		ナデ	ユビナデ	黄	にぶい	2mm以下の茶・黒・褐色の砂粒を含む	
64	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区B7/C'6		201		ハケメ	ハケメ	黒 緑	黒 緑	2.5mm以下の浅赤・褐色の砂粒を含む	
65	弥生土器	甕・口縁部	D区		205		ハケメ	ナデ	にぶい	にぶい	2mm以下の黒・灰・褐色の砂粒を含む	外面にススが付着
66	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区B'6		257		ハケメ	不明	にぶい	にぶい	6mm以下の黄・褐色の砂粒を含む	
67	弥生土器	甕・口縁～胴部	B区		185		ナデ	ハケメ	にぶい	にぶい	精緻	
68	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区B6		173		不明	ナデ	浅黄緑	にぶい	3mm以下の赤・黒・灰・褐色の砂粒を含む	
69	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区		236		不明	ハケメ	にぶい	にぶい	4mm以下の黒・灰・白・褐色の砂粒を含む	
70	弥生土器	甕・口縁部	D区		250		不明	不明	黄	にぶい	3mm以下の赤・黒・白色の砂粒を含む	
71	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区		194		ハケメ	ナデ	灰 黄	灰 白	2mm以下の灰白・褐色の砂粒を含む	
72	弥生土器	甕・胴部～胴部	D区		228		ハケメ	ハケメ	にぶい	にぶい	3mm以下の赤・灰・褐色の砂粒を含む	外面にススが付着
73	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区B7/B9/C'9		270		ハケメ	ハケメ	にぶい	にぶい	2mm以下の灰・褐色の砂粒を含む	
74	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区B'5/B'7		181		ハケメ	ナデ	にぶい	にぶい	3.5mm以下の茶・白・褐色の砂粒を含む	
75	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区		188		ナデ	ナデ	にぶい	黄 灰	3mm以下の黄・白・灰色の砂粒を含む	
76	弥生土器	甕・口縁部	D区		340		ハケメ後ナデ	ユビナデ	灰 黄	灰 黄	4mm以下の黄・白色の砂粒を含む	
77	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区B8/B9		274		ハケメ	ハケメ	にぶい	にぶい	3mm以下の黒・灰・褐色の砂粒を含む	
78	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区A7/B9		256		ハケメ	ハケメ	にぶい	にぶい	2mm以下の茶・白・灰・褐色の砂粒を含む	
79	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区		200		ナデ	ナデ	にぶい	にぶい	4mm以下の黄・茶・白・灰色の砂粒を含む	
80	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区A'6		165		ハケメ後ナデ	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	3mm以下の黒色・透明光沢の砂粒を含む	
81	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区		185		ナデ	ユビナデ	黄	灰黄緑	6mm以下の褐色の砂粒を含む	
82	弥生土器	甕・口縁部	D区		190		不明	不明	黄	黄		
83	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区		218		ナデ	ナデ	浅黄緑	にぶい	3mm以下の赤・黒・灰・褐色の砂粒を含む	
84	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区		189		ハケメ	ハケメ	黄	黄	4mm以下の茶・白・灰色の砂粒を含む	

第3表 志戸平遺跡出土土物観察表

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	径量 (cm)		調整			胎土の特徴	備考			
				口径	底径	器高	外側	内面			内面		
85	弥生土器?	甕・口縁~胴部	D区	16.1			ナデ	ナデ	灰白 灰白	2mm以下の黒・灰・褐色の砂粒を含む			
86	弥生土器?	甕・口縁~胴部	D区C'9	23.8			ナデ	ナデ	にぶい黄	5mm以下の白・灰・褐色の砂粒を含む			
87	弥生土器?	甕・口縁~胴部	D区C'4/C'8	26.8			ナデ	ナデ	にぶい黄	3mm以下の灰・褐色の砂粒を含む			
88	弥生土器	甕・口縁~胴部	D区	26.3			ハケメ	ハケメ	浅黄緑	にぶい黄	5mm以下の茶・灰・褐色の砂粒を含む		
89	弥生土器	甕・口縁~胴部	D区	24.5			ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	2.5mm以下の黒・灰褐色の砂粒を含む		
90	弥生土器	甕・口縁~胴部	B区	22.6			ハケメ	ハケメ	黄	黄	5mm以下の黒・灰・茶褐色の砂粒を含む		
91	弥生土器?	甕・口縁~胴部	D区B6	22.2			ハケメ	ハケメ	にぶい黄	にぶい黄	5mm以下の灰・褐色の砂粒を含む	外側にススが付着	
92	弥生土器?	甕・口縁部	D区	27.4			ハケメ	ハケメ	にぶい黄	灰黄緑	4mm以下の白・黒・褐色の砂粒を含む		
93	弥生土器?	甕・口縁~胴部	D区B'12	22.0			ハケメ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	4mm以下の灰・褐色の砂粒を含む	外側にススが付着	
94	弥生土器?	甕・口縁~胴部	D区A'3	26.0			ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	5mm以下の粉・白・褐色の砂粒を含む		
95	弥生土器?	甕・口縁~胴部	D区	20.6			ハケメ	ハケメ	灰黄緑	灰黄緑	5mm以下の白・黒・灰・褐色の砂粒を含む		
96	弥生土器?	甕・口縁~胴部	D区	27.5			ハケメ	ハケメ	黄	にぶい黄	4mm以下の灰白・褐色の砂粒を含む		
97	弥生土器?	甕・口縁~胴部	D区	26.0			ハケメ	ナデ	明灰灰	灰白	3mm以下の灰・褐色の砂粒を含む		
98	弥生土器?	甕・口縁~胴部	D区A'1/A'11	28.8			ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	4mm以下の灰・黄・暗褐色の砂粒を含む		
99	弥生土器	甕・口縁~胴部	D区	27.6			ハケメ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	4mm以下の粉・白・褐色の砂粒を含む		
100	弥生土器	甕・口縁~胴部	D区	25.8			ナデ	ハケメ	にぶい黄	灰イロ	3mm以下の灰・褐・黒色の砂粒を含む	外側にススが付着	
101	弥生土器	甕・口縁~胴部	D区	15.2			ハケメ	不明	にぶい黄	にぶい黄	2mm以下の灰・褐色の砂粒を含む		
102	弥生土器	甕・口縁~胴部	D区	20.2			ナデ	ナデ	灰黄緑	にぶい黄	4mm以下の白・褐色の砂粒を含む		
103	弥生土器	甕・口縁~胴部	D区	17.8			不明	不明	淡赤橙	にぶい赤	3mm以下の灰・白・褐色の砂粒を含む		
104	弥生土器?	甕・口縁~胴部	D区	16.0			ナデ	ナデ	淡黄	灰白	3mm以下の灰・褐色の砂粒を含む		
105	弥生土器	甕・口縁~胴部	D区	14.7			ハケメ	ナデ	にぶい黄	浅黄緑	3mm以下の茶・黒・灰・褐色の砂粒を含む		
106	弥生土器?	甕・口縁~胴部	D区	21.0			ハケメ	ナデ	黄	黄	5mm以下の粉・白・褐色の砂粒を含む		
107	弥生土器?	甕・口縁~胴部	D区	26.4			ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	4mm以下の灰白・褐・黒色の砂粒を含む		
108	弥生土器	甕・口縁~胴部	D区	25.5			ハケメ	ハケメ	灰黄緑	にぶい黄	4mm以下の粉・明灰灰白の砂粒を含む	外側にススが付着	
109	弥生土器	甕・口縁~胴部	D区	24.0			ナデ	ハケメ	にぶい黄	にぶい黄	4mm以下の灰白・灰黄褐色の砂粒を含む		
110	弥生土器?	甕・胴部~胴部	D区B'5	18.0			ハケメ	ハケメ	にぶい黄	にぶい黄	3mm以下の灰色の砂粒を含む		
111	弥生土器	甕・口縁~胴部	D区	23.6			ハケメ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	5mm以下の茶・灰色の砂粒を含む	外側にススが付着	
112	弥生土器	甕・口縁~胴部	D区	20.2			ハケメ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	2mm以下の茶・黒・灰褐色の砂粒を含む		
113	弥生土器	甕・口縁~胴部	D区	19.1			ナデ	ハケメ	にぶい黄	黄	4mm以下の灰・褐色の砂粒を含む		
114	弥生土器	甕・口縁~胴部	D区	16.2			ミガキ	ミガキ	黄	黄	灰	3mm以下の粉・褐色の砂粒を含む	外側にススが付着
115	弥生土器	甕・口縁~胴部	D区	27.2			ハケメ	ハケメ	灰白	灰白	5mm以下の粉・黒・灰・褐色の砂粒を含む		
116	弥生土器?	甕・口縁~胴部	D区A'5	28.6			ハケメ	ハケメ	にぶい黄	灰	4mm以下の茶・黒・灰・褐色の砂粒を含む		
117	弥生土器	甕・口縁~胴部	D区	28.0			ハケメ	ハケメ	にぶい黄	にぶい黄	5mm以下の茶・褐・白色の砂粒を含む	外側にススが付着	
118	弥生土器	甕・口縁~胴部	D区B9	30.6			ナデ	ナデ	黄	黄	8mm以下の粉・白色の砂粒を含む		
119	土師器?	甕・口縁~胴部	D区B'5	30.0			ハケメ	不明	にぶい黄	にぶい黄	5mm以下の灰・褐色の砂粒を含む		
120	弥生土器	甕・口縁~胴部	D区B'7/B'7	27.5			ハケメ	ナデ	灰	黄	にぶい黄	6mm以下の灰・褐色の砂粒を含む	
121	弥生土器?	甕・口縁~胴部	D区C'13/C'13	28.2			ナデ	ナデ	黄	黄	5mm以下の茶・白・灰・褐色の砂粒を含む		
122	弥生土器	甕・口縁~胴部	D区	19.6			ナデ	ナデ	浅黄緑	浅黄緑	4mm以下の灰・褐・白色の砂粒を含む		
123	弥生土器	甕・口縁~胴部	D区	23.1			ハケメ	ハケメ	灰黄緑	にぶい黄	5mm以下の黒・白・灰色の砂粒を含む	口縁内部に壁をもち屈曲する	
124	土師器?	甕・口縁~胴部	D区	24.5			ハケメ	ハケメ	黄	黄	4mm以下の白・灰色の砂粒を含む		
125	土師器?	甕・口縁~胴部	D区B11	18.7			ハケメ	ハケメ	にぶい黄	にぶい黄	3mm以下の白・灰・褐色の砂粒を含む	外側にススが付着	
126	土師器?	甕・口縁~胴部	D区B'13	15.0			不明	不明	灰白	灰白	5mm以下灰色の砂粒を含む		

第4表 志戸平遺跡出土遺物観察表

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量 (cm)		形状		色調		胎土の特徴	備考	
				口径	底径	器高	外面	内面	外面			内面
127	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区				ハケメ	ハケメ	灰黄褐色	にぶい黄	3mm以下の灰・褐色の砂粒を含む	
128	弥生土器	甕・口縁部	D区				ハケメ後ナデ		灰黄	灰黄	1.5mm以下の白・灰・褐色の砂粒を含む	
129	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区B9	20.2			ハケメ	ハケメ	にぶい黄	にぶい黄	2mm以下の灰・褐色の砂粒を含む	外面にススが付着
130	土師器?	甕・口縁～胴部	D区A7/B7/A8	22.2			タタキ	ハケメ	にぶい黄	暗褐	5mm以下の褐色・橙・白色の砂粒を含む	
131	土師器	甕・完形	D区D7	15.8	4.8	21.6	タタキ	ナデ	黄	黄	1cm以下の灰白色の砂粒を含む	外面にススが付着
132	土師器?	甕・口縁～胴部	D区	21.8			タタキ	ナデ	にぶい黄	灰黄褐色	3.5mm以下の灰・褐色の砂粒を含む	
133	弥生土器	甕・口縁部	D区	18.0			タタキ	不明	黄	黄	2mm前後の灰・茶褐色の砂粒を含む	
134	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区	21.5			タタキ	ナデ	明黄褐色	灰黄	3mm以下の明赤褐色・灰褐色・灰白色の砂粒を含む	
135	土師器?	甕・口縁部	D区	24.4			タタキ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	5mm以下の茶・灰・褐色の砂粒を含む	
136	土師器?	甕・口縁～胴部	D区B4/D40	25.8			タタキ	ナデ	黄灰	にぶい黄	1～3mmの褐色・灰褐色の砂粒を含む	
137	土師器	甕・口縁～胴部	D区	24.6			タタキ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	5mm以下の白・灰・褐色の砂粒を含む	
138	土師器?	甕・口縁部	D区	19.8			タタキ	ナデ	黄	黄	4mm以下の茶・白・褐色の砂粒を含む	
139	土師器?	甕・口縁部	B区	22.2			タタキ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	4mm以下の白・褐色の砂粒を含む	
140	土師器	甕・口縁～胴部	D区	22.6			タタキ	ハケメ	にぶい黄	にぶい黄	5mm以下の灰・褐色の砂粒を含む	
141	土師器	甕・口縁～胴部	D区	30.5			タタキ	ナデ	灰白	灰黄	2.5mm以下の白・灰・褐色の砂粒を含む	
142	土師器	甕・口縁部	D区	20.2			タタキ	ナデ	にぶい黄	灰黄	5mm以下の黒・白・灰色の砂粒を含む	
143	土師器	甕・口縁～胴部	D区	15.2			タタキ	ユビナデ	にぶい黄	黄灰	6mm以下の白・灰・褐色の砂粒を含む	
144	土師器?	甕・ほぼ完形	D区W5	18.0	4.0		タタキ	ナデ	黄	黄	5mm以下の灰白・褐色の砂粒を含む	
145	土師器	甕・口縁～胴部	B区	24.8			タタキ	ハケメ	にぶい黄	にぶい黄	2mm以下の黒・灰・褐色の砂粒を含む	
146	弥生土器	甕・口縁～胴部	D区	21.5			タタキ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	4mm以下の灰・褐色の砂粒を含む	歪みが強い
147	弥生土器	甕・胴部～底部	D区	7.6			ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	にぶい黄	にぶい黄	5mm以下の黄・白・褐色の砂粒を含む	
148	弥生土器?	甕・底部	D区	6.8			ナデ	ナデ	にぶい黄	黄灰	1～4mm以下の灰白・褐色の砂粒を含む	
149	弥生土器?	甕・底部	D区	6.5			ハケメ	ナデ	灰白	灰白	4mm以下の灰・褐色の砂粒を含む	
150	弥生土器?	甕・底部	D区	4.3			ナデ	ナデ	灰白	灰白	4mm以下の灰・褐色の砂粒を含む	
151	弥生土器	甕・底部	D区	6.7			ナデ	ユビナデ	灰黄	灰白	3mm以下の灰白・灰色の砂粒を含む	
152	弥生土器	甕・底部	D区B'18	4.9			ユビナデ	ナデ	黄褐色	黄灰	3mm以下の灰・黄・橙色の砂粒を含む	
153	弥生土器	甕・底部	D区	3.8			ナデ	ナデ	灰白	黄灰	2.5mm以下の灰白色の砂粒を含む	
154	弥生土器	甕・胴～底部	D区A7	5.8			ナデ	ナデ	灰黄	にぶい黄	2mm以下の褐色・灰白色の砂粒を含む	
155	弥生土器?	甕・底部	D区	4.0			ハケメ	ナデ	黄	灰黄褐色	4mm以下の灰白色・褐色の砂粒を含む	
156	弥生土器	甕・底部	D区	7.6			ナデ	ナデ	黄灰	黄灰	2.5mm以下の灰白・褐色の砂粒を含む	
157	弥生土器	甕・底部	D区	6.8			ナデ	ナデ	にぶい黄	灰黄	2～5mm以下の灰白・褐色の砂粒を含む	
158	弥生土器	甕・底部	D区	6.2			ナデ	ナデ	灰白	黄灰	2mm以下の灰白・褐色の砂粒を含む	
159	弥生土器	甕・底部	D区	5.3			ナデ	ユビナデ	灰白	灰白	2mm以下の灰色の砂粒を含む	
160	弥生土器	鉢・胴～底部	D区A9/B9/C9/D9	7.2			ナデ	ナデ	にぶい黄	灰黄褐色	5mm以下の灰・褐色の砂粒を含む	
161	弥生土器?	甕・底部	D区	5.5			ユビナデ	ユビナデ	にぶい黄	にぶい黄	1～4mm以下の灰白色の砂粒を含む	
162	弥生土器	甕・底部	D区	4.6			ユビナデ	ハケメ	灰白	灰白	2mm以下の灰・褐色の砂粒を含む	
163	弥生土器?	甕・底部	D区	4.4			ナデ	ナデ	にぶい黄	黄	2～5mm以下の灰白・褐色の砂粒を含む	
164	弥生土器	甕・底部	D区B10	5.3			ハケメ	ナデ	にぶい黄	黒	3mm以下の褐色・灰白色の砂粒を含む	
165	弥生土器	甕・底部	D区A9	4.2			ハケメ	ハケメ	黄灰	灰黄	1～3mm以下の灰・褐色の砂粒を含む	
166	弥生土器?	甕・底部	D区	5.3			ナデ	ナデ	にぶい黄	黄灰	4mm以下の塊状・灰白色の砂粒を含む	
167	弥生土器?	甕・底部	D区	6.6			不明	不明	にぶい黄	にぶい黄	3mm以下の灰白色の砂粒を含む	
168	弥生土器	甕・底部	D区	7.9			ナデ	ユビナデ	にぶい黄	にぶい黄	4mm以下の灰色の砂粒を含む	

第5表 志戸平遺跡出土土物観察表

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量 (cm)			調整			胎土の特徴	備考	
				口径	底径	器高	外国	内面	外面			内面
169	弥生土器?	甕・底部	D区	45			ナデ	ナデ	明焼灰	灰 白	1cm以下の灰白・黄灰色の砂粒を含む	
170	土師器?	甕・底部	D区	57			タタキ	ナデ	黄 灰	にぶい黄	3mm前後の黒・灰・褐色の砂粒を含む	
171	土師器?	甕・底部	D区	45			タタキ	ユビナデ	にぶい黄	黄	3cm以下の灰・褐色の砂粒を含む	
172	土師器?	甕・底部	D区	63			タタキ	ハケメ	にぶい黄	黒 黄	5cm以下の黒・灰・褐色の砂粒を含む	
173	土師器?	甕・底部	D区A9	45			タタキ	ユビナデ	黄 黄	黄 黄	5cmの黄・白・灰色の砂粒を含む	
174	土師器?	甕・底部	D区	37			タタキ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	2cm以下の灰白・褐色の砂粒を含む	
175	土師器?	甕・底部	D区	39			タタキ	ユビナデ	黄 黄	にぶい黄	4cm以下の赤・茶・灰・褐色の砂粒を含む	
178	弥生土器	壺・口縁部	D区B'7	123			ナデ	ナデ	黄 黄	灰 黄	精緻	横式系
179	弥生土器	壺・耳部	D区B12/B'7	36.9			ミガキ	ミガキ	黄 黄	黄 黄	3cm以下の赤・灰・褐色の砂粒を含む	
180	弥生土器	甕・頸部	D区				ミガキ	不明	黄 黄	灰 白	3cm以下の赤・灰・褐色の砂粒を含む	頸部に突帯が通る
181	弥生土器	壺・口縁部	D区	122			ナデ	ナデ	にぶい黄	黄	4cm以下の黒・灰・褐色の砂粒を含む	口縁部に凹線文が通る
182	弥生土器	壺・口縁・頸部	D区	178			ミガキ	ナデ	にぶい黄	黄	2cm以下の灰黄・灰白色の砂粒を含む	口縁部に凹線文が通る
183	弥生土器	壺・口縁・頸部	D区C15	155			ナデ	ナデ	黄 黄	灰 黄	2cm以下の灰・灰・褐色の砂粒を含む	口唇部に凹線文が通る
184	弥生土器	壺・口縁・頸部	D区B'7	168			ハケメ	ハケメ	黄	黄	3cm以下の灰・白・褐色の砂粒を含む	腹門内系?
185	弥生土器	壺・口縁・頸部	D区	161			ナデ	ユビナデ	灰 白	にぶい黄	4cm以下の赤・灰色の砂粒を含む	
186	弥生土器	壺・口縁・頸部	D区	229			ナデ	ナデ	黄 黄	黄 黄	4cm以下の赤・黒・灰・褐色の砂粒を含む	
187	弥生土器	壺・頸部	B区				ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	2cm以下の赤・黒・褐色の砂粒を含む	頸部に突帯が通る
188	弥生土器	壺・口縁・頸部	D区	176			ハケメ	ナデ	灰黄濁	にぶい黄	3cm以下の赤・灰・白・黒色の砂粒を含む	
189	弥生土器	壺・口縁・頸部	D区	190			ハケメ	ハケメ	にぶい黄	黄	2cm以下の灰白・黄緑・褐色の砂粒を含む	
190	弥生土器	壺・口縁・頸部	D区	144			不明	不明	灰黄濁	灰黄濁	2cm以下の灰・褐色の砂粒を含む	
191	弥生土器	壺・口縁・頸部	D区		134		ハケメ	ハケメ	灰 白	灰 黄	1cm以下の黄・灰色の砂粒を含む	
192	弥生土器	壺・口縁・頸部	D区	122			ナデ	ナデ	黄 黄	黄 黄	2cm以下の灰白・褐色の砂粒を含む	
193	弥生土器	壺・口縁・頸部	D区B9	154			ハケメ	不明	灰 白	灰 白	5cm以下の灰・黒・白色の砂粒を含む	
194	弥生土器?	壺・口縁部	D区C'4/C'8	132			ハケメ	ハケメ	にぶい黄	にぶい黄	3cm以下の灰・褐色の砂粒を含む	
195	弥生土器	壺・口縁・頸部	D区	108			ナデ	ナデ	黄	黄	3cm以下の白・灰・褐色の砂粒を含む	
196	弥生土器	壺・口縁・頸部	D区	132			ナデ	ハケメ	にぶい黄	にぶい黄	3mm前後の赤・灰・黒色の砂粒を含む	
197	弥生土器	壺・口縁部	D区	114			ミガキ	ミガキ	灰黄濁	黄 灰	精緻	
198	弥生土器	壺・口縁・頸部	D区	109			不明	不明	にぶい黄	灰 黄	3cm以下の灰・にぶい褐色の砂粒を含む	
199	弥生土器?	甕・完形	D区A10	106	55		ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	2cm以下の灰・褐色の砂粒を含む	
200	弥生土器	甕・口縁部	D区C15	130			ハケメ	ユビナデ	灰 白	灰 白	精緻	
201	弥生土器?	壺・口縁・頸部	D区B15/C16	160			ハケメ	ハケメ	黄 黄	黄 黄	3cm以下の黄・灰色の砂粒を含む	
202	弥生土器	壺・口縁・頸部	D区C'4	112			ハケメ	ハケメ	にぶい黄	にぶい黄	1cm以下の赤・白・褐色の砂粒を含む	
203	弥生土器	壺・口縁・頸部	D区	142			不明	不明	にぶい黄	にぶい黄	4cm以下の灰白・茶褐色の砂粒を含む	
204	弥生土器	壺・口縁・頸部	D区	117			ナデ	ナデ	にぶい黄	黄 黄	2cm以下の灰・褐色の砂粒を含む	
205	弥生土器	壺・口縁・頸部	D区	91			ナデ	ハケメ	にぶい黄	にぶい黄	精緻	
206	弥生土器	甕・完形	D区C15/C16	51			ハケメ	ハケメ	灰黄濁	にぶい黄	精緻	
207	弥生土器	壺・口縁・頸部	D区	130			ハケメ	ハケメ	黄	黄	3cm以下の灰・灰白色の砂粒を含む	
208	弥生土器	壺・口縁部	D区	104			ハケメ	ハケメ	黄 黄	黄 黄	精緻	
209	弥生土器	壺・口縁・頸部	D区	111			ハケメ	ハケメ	にぶい黄	にぶい黄	3cm以下の赤・灰・褐色の砂粒を含む	
210	弥生土器	壺・口縁・頸部	D区B'7	122			ハケメ	ナデ	にぶい黄	灰 黄	3cm以下の灰・にぶい褐色の砂粒を含む	
211	弥生土器?	壺・口縁部	D区	133			タタキ	ユビナデ	黄	にぶい黄	精緻	
212	弥生土器?	壺・口縁部	D区	118			ナデ	ユビナデ	にぶい黄	にぶい黄	精緻	

第6表 志戸平遺跡出土遺物観察表

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量 (cm)		画像		色調		粘土の特徴	備考	
				口径	底径	器高	外面	内面	外面			内面
213	弥生土器	壺・口縁部	D区B6	87			不明	不明	灰白	灰白	1m以下の灰色の砂粒を含む	
214	弥生土器	壺・口縁-胴部	D区C'6	135			ミガキ	ユビナダ	灰白	灰白	精緻	
215	弥生土器	壺・口縁-胴部	D区C'4/C'5	129			ミガキ	ハケメ	灰白	灰白	2m以下の黄・赤・褐色の砂粒を含む	
216	弥生土器	壺・口縁-胴部	D区A'9	114			ハケメ後ナダ	不明	浅黄緑	浅黄緑	精緻	
217	弥生土器	壺・口縁部	D区	105			ナダ	ナダ	黄緑	灰白	3m以下の灰・褐色の砂粒を含む	
218	弥生土器	壺・口縁部	D区A'7	185			ミガキ	ナダ	黄緑	黄緑	精緻	
219	弥生土器	壺・口縁部	D区	48			ミガキ	ナダ		黄緑	精緻	
220	弥生土器	壺・口縁部	D区	278			ミガキ	ナダ	灰白	灰白	3m以下の赤・白・黒・灰色の砂粒を含む	二重口縁部・磨面状文を有す
221	弥生土器	壺・口縁部	D区	264			ハケメ	ナダ	灰白	灰白	4m以下の赤・白・灰・褐色の砂粒を含む	二重口縁部・磨面状文を有す
222	弥生土器	壺・口縁-胴部	D区	233			ハケメ	ナダ	灰白	浅黄緑	3m以下の灰・褐色の砂粒を含む	二重口縁部・磨面状文を有す
223	弥生土器	壺・口縁-胴部	D区	191			ナダ	ハケメ	浅黄緑	黄緑	5m以下の赤・灰・褐色の砂粒を含む	二重口縁部・磨面状文を有す
224	弥生土器	壺・口縁-胴部	D区	215			ハケメ	ハケメ	灰白	灰白	3m以下の赤・灰・褐色の砂粒を含む	二重口縁部・磨面状文を有す
225	弥生土器	壺・口縁-胴部	D区	120			ハケメ	ハケメ	灰白	灰白	4m以下の灰門・赤褐色の砂粒を含む	二重口縁部・磨面状文を有す
226	弥生土器	壺・口縁部	D区	109			不明	不明	灰白	灰白	2m以下の赤・灰色の砂粒を含む	二重口縁部・磨面状文を有す
227	弥生土器	壺・口縁-胴部	D区A7/B9	166			ハケメ	ナダ	灰白	黄緑	5m以下の赤・灰・白色の砂粒を含む	二重口縁部・磨面状文を有す
228	弥生土器	壺・口縁-胴部	D区A1/B10/C13/B11	180			ハケメ後ミガキ	ハケメ	灰白	灰白	35m以下の黄・白・灰色の砂粒を含む	二重口縁部・磨面状文を有す
229	弥生土器	壺・口縁-胴部	D区	138			ハケメ	ハケメ	浅黄緑	浅黄緑	3m以下の赤・黒・褐色の砂粒を含む	二重口縁部・磨面状文を有す
232	弥生土器	壺・口縁-胴部	D区	150			ハケメ	ナダ	灰白	灰白	5m以下の白・灰色の砂粒を含む	二重口縁部
233	弥生土器	壺・口縁-胴部	D区	145			ハケメ	ハケメ	灰白	灰白	4m以下の灰・白・褐色の砂粒を含む	二重口縁部
234	弥生土器	壺・口縁-胴部	D区B11	145			ハケメ	ナダ		黄緑	3m以下の灰・白・褐色の砂粒を含む	二重口縁部・磨面状文を有す
235	弥生土器	壺・口縁-胴部	D区	160			ナダ	ナダ	浅黄緑	浅黄緑	4m以下の赤・灰・白・褐色の砂粒を含む	二重口縁部
236	弥生土器	壺・口縁部	D区	150			ミガキ	ナダ	灰白	灰白	3m以下の赤・灰・黒色の砂粒を含む	二重口縁部
237	弥生土器	壺・口縁-胴部	D区C'5/B'7/B'6	175			ハケメ	ハケメ	灰白	灰白	2m以下の赤・黒・褐色の砂粒を含む	二重口縁部・磨面状文を有す
238	弥生土器	壺・口縁部	D区	135			ナダ	ハケメ	黄緑	浅黄緑	3m以下の灰色の砂粒を含む	二重口縁部・磨面状文を有す
239	弥生土器	壺・口縁-胴部	D区C'9/D10	118			ナダ	ナダ	灰白	灰白	3m以下の灰色の砂粒を含む	二重口縁部
240	弥生土器	壺・口縁-胴部	D区	154			ミガキ	不明	浅黄緑	浅黄緑	3m以下の黄・灰・褐色の砂粒を含む	二重口縁部
241	弥生土器	壺・口縁-胴部	D区A7/B'7/C'9/D7	148			ハケメ	ハケメ	灰白	灰白	3m以下の灰色の砂粒を含む	二重口縁部
242	弥生土器	壺・口縁-胴部	D区A'13	108			不明	ナダ	灰白	灰白	4m以下の灰色の砂粒を含む	二重口縁部
243	弥生土器	壺・ほぼ球形	D区	252	90	629	ハケメ後ミガキ	ハケメ	灰白	灰白	4m以下の白・褐色の砂粒を含む	二重口縁部・磨面状文を有す
244	土師器	壺・完形	D区	181	34	342	ミガキ	ハケメ	灰白	灰白	3m以下の赤・黒・灰・褐色の砂粒を含む	二重口縁部・磨面状文を有す
245	土師器	壺・完形	D区D'4	117	30		ハケメ	ハケメ	灰白	灰白	4m以下の赤・黒・灰・褐色の砂粒を含む	二重口縁部
246	土師器	壺・口縁-胴部	D区A'8/B'8	190			不明	不明	灰白	灰白	25m以下の赤・灰・褐色の砂粒を含む	二重口縁部
247	弥生土器	壺・胴部	D区				ナダ	ナダ	浅黄緑	灰白	3m以下の黄・白・灰・褐色の砂粒を含む	二重口縁部・二重口縁部を有す
248	弥生土器	壺・胴部	D区				不明	ハケメ	灰白	灰白	3m以下の灰・褐色の砂粒を含む	二重口縁部・二重口縁部を有す
249	弥生土器	壺・胴-底部	D区B9	63			ユビナダ	ナダ	灰白	灰白	5m以下の黄・乳白色の砂粒を含む	
250	弥生土器	壺・底部	D区N'10/C'10	74			ユビナダ	ユビナダ	灰白	黒	3m以下の褐色・灰色の砂粒を含む	
251	弥生土器	壺・底部	D区	69			ナダ	ナダ	灰白	黄緑	5m以下の黄灰色・赤褐色の砂粒を含む	
252	弥生土器	壺・底部	D区	78			ユビナダ	ナダ	浅黄緑	浅黄緑	4m以下の灰・赤・褐色の砂粒を含む	
253	弥生土器	壺・胴-底部	D区	78			ハケメ	ユビナダ	灰白	灰白	3m以下の灰白色・灰黄色の砂粒を含む	
254	弥生土器	壺・胴-底部	D区	60			ナダ	ナダ	灰白	灰白	3m以下の褐色・灰褐色の砂粒を含む	
255	弥生土器	壺・底部	D区	67			ナダ	ナダ	灰白	灰白	3m以下の灰・褐色の砂粒を含む	
256	土師器	壺・底部	D区	50			タタキ	ナダ	灰白	灰白	2m以下の赤・褐色の砂粒を含む	

第7表 志戸平遺跡出土土物観察表

遺物 番号	種別	器壁・部位	出土地点	法量 (cm)		調査				胎土の特徵	備考			
				口径	底径	器高	外面	内面	外面			内面		
257	弥生土器	壺・底部	D区			6.9	ナデ	ハケメ	にぶい黄	灰	5mm以下の褐色・灰色の砂粒を含む。			
258	弥生土器	壺・底部	D区B'7			8.0	ナデ	ナデ	灰白	黒	2mm以下の褐色・灰白色の砂粒を含む。			
259	弥生土器	壺・底部	D区			7.5	不明	不明	黄	灰白	5mm以下の灰・オリーブ色の砂粒を含む。			
260	弥生土器	壺・底部	D区			6.3	ナデ	ナデ	灰白	灰白	2mm以下の灰・黄灰・茶色の砂粒を含む。			
261	弥生土器	壺・底部	D区			8.0	不明	不明	灰白	灰白	2mm以下の灰白・褐色の砂粒を含む。			
262	弥生土器?	壺・底部	D区			5.7	ナデ	ナデ	灰白	黄灰	2.5mm以下の灰白・浅褐色・褐色の砂粒を含む。			
263	弥生土器	壺・底部	D区			6.5	ミダキ ナデ	ナデ	浅黄緑	灰白	3mm以下の灰白・褐色の砂粒を含む。			
264	弥生土器	壺・頸部～底部	D区A10/B7A3/A9/C'2/D2			7.9	ハケメ	ナデ	浅黄緑	にぶい黄	7mm以下の茶・黒・白・褐色の砂粒を含む。 黄緑色透明・灰・茶・褐色の砂粒を含む。	二次加工を受けける		
265	弥生土器?	壺・底部	D区			8.1	不明	不明	黄	灰	黄	2.5mm以下の灰白・褐・黒褐色の砂粒を含む。		
266	弥生土器?	壺・底部	D区			4.7	不明	ナデ	にぶい黄	灰	2.5mm以下の灰白・褐・黒褐色の砂粒を含む。			
267	弥生土器	壺・胴～底部	D区			5.8	ナデ	ハケメ	にぶい黄	にぶい黄	5mm以下の灰・白・褐色の砂粒を含む。			
268	弥生土器	壺・胴～底部	D区			6.5	ナデ	ナデ	灰白	にぶい黄	3mm以下の灰・黄灰・茶・白色の砂粒を含む。			
269	弥生土器	壺・底部	D区B15			6.1	ナデ	ナデ	にぶい黄	灰	4mm以下の茶・灰・白色の砂粒を含む。			
270	弥生土器?	壺・底部	D区A7/B7D'9/C'9			4.8	ナデ	ハケメ	灰白	灰	2mm以下の白・黒褐色の砂粒を含む。			
271	弥生土器?	壺・胴～底部	D区			6.0	ミダキ	ハケメ	黄	灰	黒	1.5mm以下の灰白色の砂粒。 6.5mm以下の透明の砂粒を含む。		
272	弥生土器	壺・底部	D区			4.4	ナデ	ナデ	にぶい黄	灰黄緑	黄	2mm以下の茶・灰・白・褐色の砂粒を含む。		
273	弥生土器	壺・底部	D区			5.2	ナデ	ナデ	浅黄緑	黄	2～4mm以下の白・褐色の砂粒を含む。			
274	弥生土器	壺・底部	D区			4.3	不明	不明	にぶい黄	にぶい黄	3mm以下の灰・褐色の砂粒を含む。			
275	弥生土器	壺・底部	D区			3.8	不明	不明	にぶい黄	にぶい黄	2mm以下の灰・褐色の砂粒を含む。			
276	弥生土器	壺・底部	D区			3.0	ハケメ	ハケメ	灰白	灰白	3mm以下の灰白・黄・黒・褐色の砂粒を含む。			
277	弥生土器	壺・頸部～底部	D区			4.4	ハケメ	ハケメ	浅黄緑	灰	白	3mm以下の茶・灰・黒・褐色の砂粒を含む。		
278	弥生土器	壺・胴～底部	D区			3.1	ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	4mm以下の白・黒・褐色の砂粒を含む。			
279	弥生土器	壺・胴部～底部	D区			5.2	不明	ナデ	灰白	黄灰	黄	3mm以下の灰・灰白色の砂粒を含む。		
280	弥生土器	壺・底部	D区B18			3.3	不明	不明	にぶい黄	黄灰	黄	3mm以下の灰白・黄灰・褐色の砂粒を含む。		
281	弥生土器?	壺・底部	D区			3.6	ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	黄	3mm以下の黄・白・黒・褐色の砂粒を含む。		
282	弥生土器	壺・胴～底部	D区			3.0	ハケメ	ナデ	浅黄緑	にぶい黄	黄	4mm以下の褐色・灰白色の砂粒を含む。		
283	弥生土器	壺・胴～底部	D区			3.0	ナデ	ナデ	にぶい黄	灰黄緑	黄	3mm以下の灰・白・黒色の砂粒を含む。		
284	弥生土器?	壺・底部	D区C16		4.5		ミダキ	ハケメ	浅黄緑	黄灰	黄	3mm以下の黄・灰色の砂粒を含む。		
285	弥生土器	壺・胴～底部	D区C14			6.5	ハケメ	ナデ	灰	黄	灰白	3mm以下の灰・褐色の砂粒を含む。		
286	弥生土器	壺・胴～底部	D区C'7			3.5	ナデ	ハケメ	にぶい黄	オリーブ	黄	1mm以下の黒・白・褐色の砂粒を含む。		
287	弥生土器	壺・底部	D区			4.6	ナデ	ナデ	にぶい黄	灰	黄	6mm以下の灰白・褐色の砂粒を含む。		
288	弥生土器?	壺・完形	D区		11.6	24.2	ハケメ	ハケメ	にぶい黄	にぶい黄	黄	3mm以下の黄・白・黒・褐色の砂粒を含む。		
289	弥生土器	壺・胴～底部	D区			4.9	不明	不明	にぶい黄	にぶい黄	黄	4mm以下の茶・白・褐色の砂粒を含む。		
290	弥生土器	壺・胴～底部	D区			3.6	ハケメ ミダキ	ナデ	にぶい黄	黄	黄	3mm以下の灰・褐色の砂粒を含む。		
291	弥生土器	壺・底部	D区			4.0	ナデ	ナデ	灰白	灰白	灰白	1.5mm以下の白・灰色の砂粒を含む。		
292	弥生土器	壺・胴～底部	D区			5.8	ナデ	ハケメ	灰白	灰白	灰白	3mm以下の灰褐色の砂粒を含む。		
293	弥生土器?	壺・底部	D区			2.3	ハケメ	ハケメ	にぶい黄	黄灰	黄	3mm以下の黄・灰色の砂粒を含む。		
294	弥生土器	壺・胴部	D区				不明	ナデ	灰白	灰白	灰白	2mm以下の灰・褐色の砂粒を含む。		
295	弥生土器	壺・胴部～胴部	D区C'4				ハケメ	ハケメ	にぶい黄	灰	黄	3mm以下の茶・灰・黒・褐色の砂粒を含む。		
296	弥生土器	壺・胴部～胴部	D区				ハケメ	ハケメ	灰	黄	黄	1mm以下の灰白色の砂粒を含む。		
297	弥生土器	壺・胴部	D区A7/A9				タダキ	ハケメ	灰	黄	黄	7.5mm以下の灰・褐色の砂粒を含む。		
298	土師器?	壺・ほぼ完形	D区			10.1	2.1	11.1	ハケメ	ハケメ ナデ	にぶい黄	にぶい黄	6mm以下の黄・白・灰色の砂粒を含む。	

第8表 志戸平遺跡出土遺物観察表

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	流量 (ml)		調整		色調		胎土の特徴	備考	
				口徑	底径	器高	外面	内面	外面			内面
299	土師器?	壺・頸部-底部	B区			調整最大径12.1cm	ナア	ナア	黄	黄	2mm以下の白・灰色の砂粒を含む	
300	土師器?	壺・胴部	D区				ミガキ	ナア	灰白	黄	3mm以下の赤・黒・灰・褐色の砂粒を含む	
301	弥生土器	壺・頸部	D区B11				ハケメ	ハケメ	黄	黄	4mm以下の灰・白・褐色の砂粒を含む	
302	弥生土器	壺・頸部	D区				ミガキ	ナア	淡黄	淡黄	2.5mm以下の白・灰・褐色の砂粒を含む	
303	弥生土器	壺・頸部-底部	D区				ハケメ	ユビナア	灰黄	灰	6mm以下の白色の砂粒を含む	
304	弥生土器	壺・胴部	D区A7				ミガキ	ハケメ	灰白	灰	5mm以下の灰・白・褐色の砂粒を含む	
305	弥生土器	壺・口縁部	D区			175	ナア	ハケメ	灰白	黄	1mm以下の白・灰・褐色の砂粒を含む	
306	弥生土器	壺・頸部-底部	D区			36	ナア	ユビナア	灰白	黄	4mm以下の褐色の砂粒を含む	
307	弥生土器	壺・口縁-胴部	D区			68	ナア	ナア	灰白	灰白	3mm以下の赤・灰・褐色の砂粒を含む	
308	弥生土器?	壺・口縁部	D区			85	ナア	ナア	灰白	黄	3mm以下の赤・灰・褐色の砂粒を含む	
309	弥生土器	壺・口縁部	D区			80	不明	不明	黄	黄	3mm以下の赤・灰・褐色の砂粒を含む	
310	弥生土器	壺・口縁部	D区						灰白	灰白	3mm以下の赤・灰・褐色の砂粒を含む	
311	弥生土器?	壺・口縁部	D区			98	ナア	ナア	灰白	黄	1mm以下の赤・灰・褐色の砂粒を含む	
312	弥生土器	壺・口縁-肩部	D区			158	ハケメ	ハケメ	灰白	黄	2.5mm以下の黄・灰・褐色の砂粒を含む	
313	弥生土器	壺・胴部	D区				不明	ユビナア	灰白	黄	3mm以下の灰色の砂粒を含む	
314	弥生土器	壺・胴部	D区B7				不明	ユビナア	灰白	黄	2mm以下の赤・灰・褐色の砂粒を含む	
315	弥生土器	壺・胴部	D区				不明	ユビナア	淡黄	灰白	3mm以下の赤・灰色の砂粒を含む	
316	弥生土器	壺・胴部	D区				ナア	ナア	黄	黄	3mm以下の赤・褐色の砂粒を含む	
317	弥生土器	壺・胴部	D区				ナア	ナア	灰白	灰白	2mm以下の褐色の砂粒を含む	
318	弥生土器	壺・口縁-胴部	D区A6			118	ミガキ	ハケメ	灰白	黄	4mm以下の白・灰・褐色の砂粒を含む	
319	弥生土器	壺・頸部-底部	D区B9C9/D9/A9/A10			58	ミガキ	ハケメ	灰白	灰黄	2mm以下の灰白・褐色の砂粒を含む	
320	弥生土器	壺・口縁-胴部	D区C15			151	不明	不明	黄	黄	4mm以下の赤・灰・褐色の砂粒を含む	遺品調査部に 送付あり
321	弥生土器	壺・口縁-胴部	D区			81	ナア	ユビナア	灰白	黄	2mm以下の白・灰・褐色の砂粒を含む	
322	弥生土器	壺・頸部	D区A10				ナア	ナア	灰白	黄	2mm以下の灰・白・褐色の砂粒を含む	
323	弥生土器	壺・底部	D区			56	不明	不明	灰白	黄	4mm以下の灰白・白濁・明褐色の砂粒を含む	
324	弥生土器	壺・胴-底部	D区			50	ハケメ	ハケメ	灰白	黄	3mm以下の赤・褐色の砂粒を含む	
325	弥生土器	高坏・坏部	D区C5			230	ミガキ	ナア	灰白	黄	3mm以下の白・黄・褐色の砂粒を含む	
326	土師器?	高坏・坏部	D区				不明	不明	黄	黄	1mm以下の灰色の砂粒を含む	
327	土師器?	高坏・坏部	D区				ナア	ナア	淡黄	黄	2mm以下の赤・灰白色の砂粒を含む	
327	土師器?	高坏・坏部	B区			180	ミガキ	ミガキ	灰白	黄	1mm以下の茶色の砂粒を含む	
328	土師器?	高坏・坏部	B区				ハケメ	不明	淡黄	淡黄	1mm以下の赤・黒・灰・褐色の砂粒を含む	
330	土師器?	高坏・坏部	B区				不明	不明	灰白	灰白	1mm以下の白・灰・褐色の砂粒を含む	
331	弥生土器	高坏・坏部	D区			335	不明	ナア	灰白	灰白	3mm以下の灰・褐・茶褐色の砂粒を含む	外倉の炭化が強い 二次焼成か?
332	弥生土器	高坏・坏部	D区B8/C6			290	ミガキ	ミガキ	灰黄	灰黄	2mm以下の灰・褐色の砂粒を含む	
333	弥生土器	高坏・坏部	D区B9/40			330	ミガキ	ミガキ	赤黄	赤黄	1.5mm以下の灰濁・褐色の砂粒を含む	
334	弥生土器	高坏・坏部	D区			335	不明	ミガキ?	淡黄	淡黄	3mm以下の灰・褐・褐色の砂粒を含む	
335	弥生土器	高坏・坏部	D区A7			335	ミガキ	ミガキ	明赤	灰白	3mm以下の灰白・褐色の砂粒を含む	
336	弥生土器	高坏・胴部	D区				ミガキ	ミガキ	淡黄	灰白	3mm以下の赤・灰・褐色の砂粒を含む	
337	弥生土器	高坏・胴部	D区			260	ナア	ハケメ	黄	灰	3mm以下の白・褐色の砂粒を含む	
338	弥生土器	高坏・坏部	D区			170	ナア	ナア	灰白	黄	1mm以下の灰白・褐色の砂粒を含む	
339	弥生土器	高坏・胴部	D区			230	ミガキ	ハケメ	灰白	黄	2mm以下の灰・褐色の砂粒を含む	
340	弥生土器	高坏・胴-底部	D区			170	ミガキ	ナア	灰白	黄	2mm以下の灰・茶褐色の砂粒を含む	

第9表 志戸平遺跡出土土物観察表

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量 (cm)		胴径		色調		胎土の特徴	備考
				口徑	底徑	器高	外面	内面	外面		
341	土器器?	高坏・脚一帯部	D区		240						
342	土器器?	高坏・脚部	D区								
343	弥生土器	高坏・脚部	D区B9		178						
344	弥生土器	高坏・脚部	D区C15		205						
345	弥生土器	高坏・脚一帯部	D区A10								
346	弥生土器	高坏・脚一帯部	D区A10								
347	弥生土器	高坏・脚一帯部	D区								
348	弥生土器	高坏・脚一帯部	D区群7								
349	弥生土器	高坏・脚部	D区		334						
350	弥生土器	高坏・脚部	D区B6		209						
351	弥生土器	器台・受部	B区		184						
352	弥生土器	器台・受部	D区A8		383						
353	弥生土器	器台・脚部	D区								
354	弥生土器	器台・脚部	D区								
355	弥生土器	器台・口縁一帯部	D区		155	157	162				
356	弥生土器	器台・脚部	D区								
357	弥生土器	器台・脚部一帯部	D区		148						
358	弥生土器	器台・脚部	D区								
359	弥生土器	器台・脚部一帯部	D区		208						
360	弥生土器	器台・受部一底部	D区		185	128	132				
361	弥生土器	器台・脚部一帯部	D区		194						
362	弥生土器	器台・脚部	D区		251						
363	弥生土器	器台・脚部	D区A7/B9		176						
364	弥生土器	柄部	D区A11								
365	弥生土器?	不明・胴部	D区								
366	弥生土器	ミニチュア 胴部一帯部	B区		23						
367	弥生土器	ミニチュア 口縁一底部	B区		82	28	83				
368	弥生土器	ミニチュア・完形	D区		38	33	51				
369	弥生土器	ミニチュア・底部	D区		38						
370	弥生土器	ミニチュア・完形	D区		54	18	36				
371	弥生土器	ミニチュア 口縁一底部	D区		79	24	57				
372	弥生土器	ミニチュア 口縁一底部	D区		74	35	53				
373	弥生土器	ミニチュア 口縁一底部	D区		73	36	50				
374	木製品	木製品	D区								
375	木製品	榎片	D区								
376	石器	磨石	D区B3								
377	須恵器	壺・胴部	D区								
378	須恵器	壺・胴部	D区								
379	土器器	坏・体部一底部	C区		76						

## 第Ⅲ章 頭田遺跡の調査

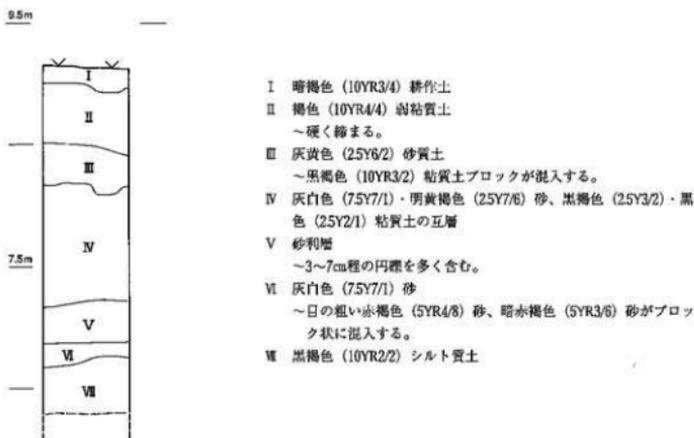
### 第1節 調査の概要

調査は、河川拡幅部分の350㎡を対象に平成9年11月25日から行なった。試掘調査の結果、現耕作面から3m前後の深堀が必要と判断され、また砂層や洪水層など軟質の土層が厚く堆積していることも確認されたため、掘下げにあたっては壁面に緩やかな勾配をとり安全性を確保しながら作業を進めた。試掘調査およびトレンチ調査により基本土層は6層に大別できた。第IV層（洪水層）中位までは遺構、遺物が確認できず第IV層下位から比較的多くの木片が出土したため、埋の検出の可能性を想定し面的調査は第IV層下位から開始した。面的な掘下げが終了した第IV層下位からは流木片のみが確認され、第V層（砂利層）上面までのトレンチ調査でも流木片が少量出土したのみであったため、第V層の上面までを一気に掘り下げた。第V層では比較的多くの遺物を採取し、また長さ1～5mの丸太や多数の小枝等を検出したが、構築物との認定はできなかった。砂利除去後、第VII層の黒褐色シルト層上面で水田等遺構の確認を行なったが、検出にはいたらなかった。第VII層上面で地形図を作成して旧地形の復元を行ない平成9年12月25日調査を終了した。

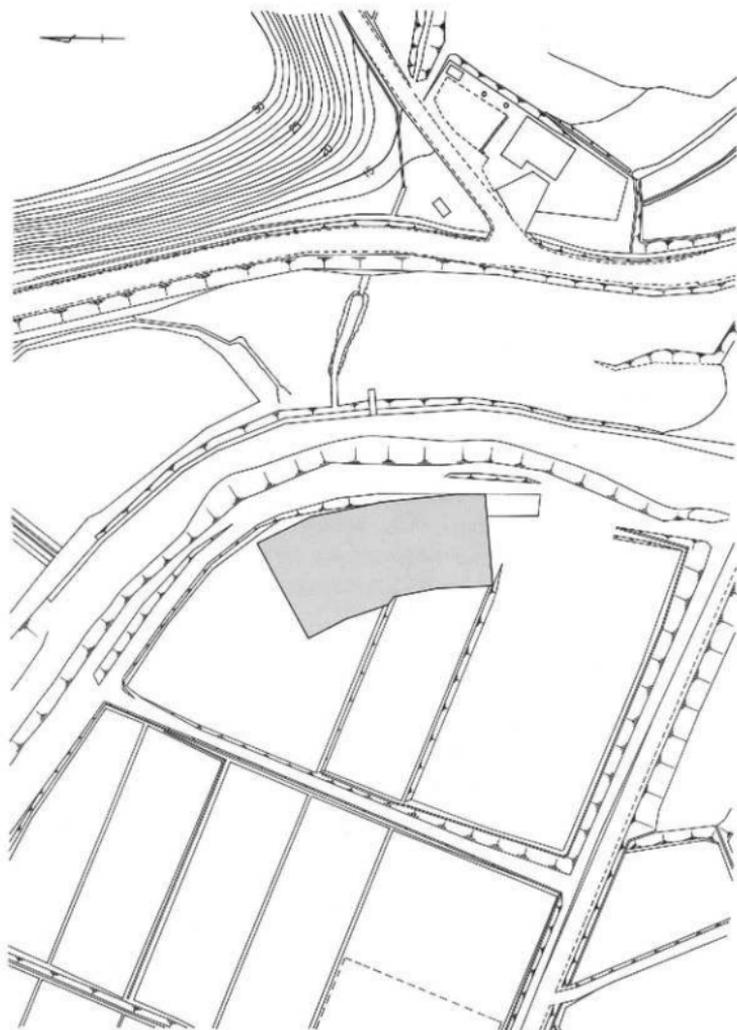
### 第2節 層序（第24図・第26図）

基本土層は、調査区東壁面の中央部で確認した。

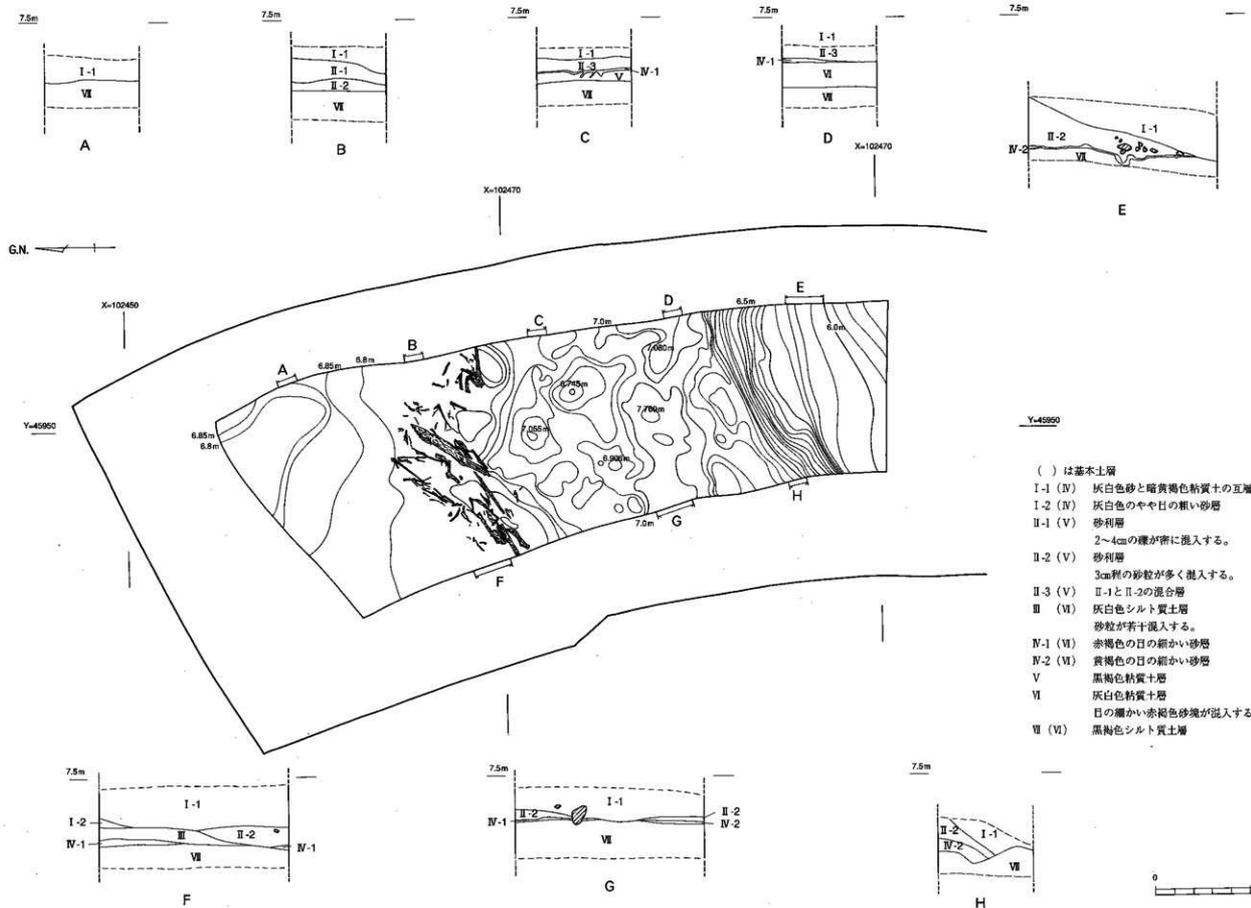
第I層は暗褐色耕作土で、約20cm堆積している。第II層は、50cm程度堆積した硬質の褐色土である。第III層は、灰黄色砂層に黒褐色粘質土がブロック状に混入しており、30cm程度堆積する。第IV層は砂層と泥層の互層が約1m堆積しており、度重なる洪水の形跡がうかがえる。第V層は3～7cmの礫が密



第24図 頭田遺跡基本土層柱状図



第 25 図 頭田遺跡周辺地形図 (1/1,000)



第26図 頭田遺跡調査区地形図 (VII層) 及び土層柱状図 (1/200)

に詰まる砂利層で、約30cm堆積している。第Ⅵ層は、灰白色の砂に赤褐色の砂利がブロック状に混入しており、5cm程度堆積する。第Ⅶ層は黒褐色シルト層で、50cm以上の堆積をみる。

各層の堆積状況を見ると、第Ⅵ層は調査区の中央から北側にかけて若干の起伏をもちつつほぼ水平に堆積するが、中央よりやや北側には東西方向に高低差約30cmの緩やかな窪みを形成している。また、調査区の南側は仰角約10°の勾配で下流側に傾斜している。これらの窪みや傾斜地を埋めるように第Ⅵ層および第Ⅴ層の砂利が堆積している。

### 第3節 遺物

調査の結果、発掘調査区の中央付近から南よりにかけて堆積していた第Ⅴ層から土器片が出土したが、遺構は確認できなかった。また、同層からは多数の小枝と長さ1～5mの丸太5本が出土している。遺物は、弥生土器・土師器片約250点余り、須恵器片1点が出土しており全て第Ⅴ層からの出土である。このうちのほとんどは砂利による摩滅や流水の作用による風化が著しいため、比較的残存の良好な22点のみを図示した。また、掲載した遺物については観察表を作成した。

#### 縄文土器（第27図380）

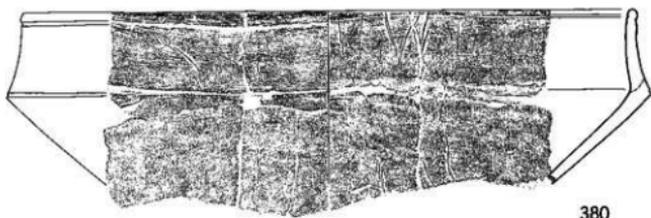
晩期の精製浅鉢が1点出土した。胴部で屈曲し、内傾する口縁部がわずかに外反しながら立ち上がるもので、屈曲部直上および口縁部の両面に沈線を巡らせている。器面調整は両面ともミガキを施す。

#### 弥生土器・土師器（第27図381～400）

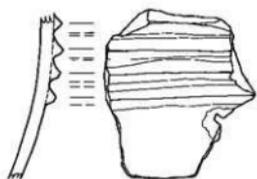
甕は6点（381～385）図示した。381は胴部で4条の突帯を貼り付けている。器面調整は両面ともナデを施す。382は外反する口縁部で、口縁端部をつまみだし肥厚させ端面に凹線を施している。両面ナデを施す。383・384は胴部でともに外面に平行タタキを施す。385は底部で中実の脚台あるいは平底を呈するものと思われる。器面調整は両面ナデを施す。壺は6点（386～391）図示した。386～388は二重口縁壺の口縁部で、386・387は拡張部が内傾する。388は直口する拡張部に篋状工具による鋸歯文を施している。389・390は胴部で肩部の張りは弱い。ともに器面調整は両面ナデである。391は丸底の底部で、両面ナデを施す。高坏は5点（392～396）図示した。392は坏部で、両面ミガキを施す。393～396は脚部で、393は傾きから394・395と同様に裾部が屈曲して開くものと思われる。397は器台の裾部で端部は開かない。円形透し孔を穿つ。398は口縁が直口する鉢で、両面ナデを施す。399は鉢形の小型土器の底部で、器面調整は両面ナデである。400は坏形の小型土器で、外面底部付近に「十」字形の線刻が施されている。器面調整は両面ナデを施す。

#### 須恵器（第27図401）

甕の胴部片が1点出土した。外面には格子目タタキを行った後ナデを施し、内面には同心円当具痕が残っている。



380



381



382



383



384



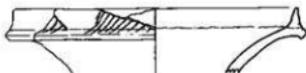
385



386



387



388



389



390



392



393



391



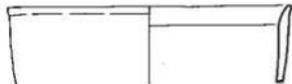
394



395



396



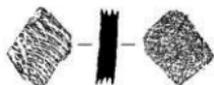
398



397



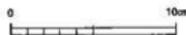
400



401



399



第27図 頭田遺跡出土遺物実測図(1/3)

#### 第4節 小結

今回の調査では第Ⅴ層から土器片が出土したが、遺構は確認できなかった。また、同層からは多数の小枝と長さ1～5mの丸太5本が出土しているが、縦材や斜材が確認できず一定方向に流れるように検出されており、木に加工痕がみられないこと、第Ⅵ層から20～30cm浮いた砂利層の中から出土していること等から堰の可能性は低く、自然流木と思われる。流木が列状に集積していたのは旧地形の起伏に起因するものであろう。

遺物は全てが第Ⅴ層からの出土で、土器は流水作用により摩滅し小片となったものがほとんどであった。このうち縄文土器は胴部が屈曲する精製浅鉢で、黒土遺跡（都城市）や上中段遺跡（鹿児島県末吉町）などでは晩期末の刻目突帯土器と共存している。弥生土器では中期に比定できる多条貼付突帯の甕（381）や後期の口縁部が「く」字形に開くものと思われる甕（382）、口縁拡張部が短く内傾あるいは直口する二重口縁壺（386～388）などが出土しているが、いずれも小片であるためより細かな時期の特定は困難である。土師器では脚部が屈曲して広がる高坏（394・395）が古墳時代前期に比定できよう。

今回は水田検出を視野に入れながら調査を行なったが、畦畔等の遺構は確認できなかった。プラントオパール分析の結果からも、本遺跡での水稲耕作の可能性は低い。隣接の風早第Ⅱ遺跡からは弥生時代終末から古墳時代前期にかけての堰が確認されているため、周辺で当該期の水田が営まれていたものと思われる。

第10表 頭田遺跡出土遺物観察表

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量 (cm)			調整				色		胎七の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	外面	内面		
380	縄文土器	鉢・口縁一部	V層	(37.4)			ミガキ 口縁と胎縁間に流線	ミガキ 口縁部に流線	黒青	黒褐色			3cm程度の灰白色の粒をわずかに、1cm以下の白色の粒を多く含む。	
381	弥生土器	壺・胴部	V層				ナゲム糸の 貼付痕等	ナゲ	青	青	青	青	3cm以下の灰白・褐色の粒を少量含む。	
382	弥生土器	壺・口縁	V層				ナゲ・指痕痕	ナゲ	青	青	青	青	1~2cmの灰・黄・乳白色の粒を多く含む。	
383	土師器	壺・胴部	V層				平行タタキ	風化の為、 調整不明	青	青	青	青	1~2cmの灰白・褐色の粒を少量含む。	
384	土師器	壺・胴部	V層				平行タタキ	ナゲ	青	青	青	青	1~2cmの灰白・褐色の粒を少量含む。	
385	弥生土器	壺・底部付近	V層				ナゲ	ナゲ・黒変	灰黄	黒	黒	黒	1cm以下の灰白・黄・褐色の粒を多く含む。	
386	弥生土器	壺・口縁	V層				風化の為、 調整不明	ナゲ	青	青	青	青	胎縁を滑り、褐色光沢状。2cm以下の灰・黄・褐色の粒を多く含む。	二重口縁
387	弥生土器	壺・口縁付近	V層				風化の為、 調整不明	風化の為、 調整不明	青	青	青	青	2cm以下の乳白・青・黄・褐色の粒を多く含む。	二重口縁
388	弥生土器	壺・口縁	V層	(17.1)			ナゲ・樹洞文	ナゲ	青	青	青	青	2cm以下の灰・灰白色の粒を多く含む。	二重口縁
389	土師器	壺・胴部	V層				ナゲ	ナゲ	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	1~2.5cmの灰・黄・乳白色の粒を多く含む。	
390	土師器	壺・胴部	V層				ナゲ	ナゲ・指痕痕	黄褐色	灰白	灰白	灰白	1~2cmの灰・褐色の粒をわずかに、1~1.5cmの黄・褐色の粒を少量含む。	
391	土師器	壺・底部	V層				ナゲ・指痕痕	ナゲ・黒変	青	灰白	灰白	灰白	1~2cm程度の灰白・褐色・青・褐色の粒を多く含む。	
392	土師器	高坏・坏部	V層				ミガキ	ミガキ	青	青	青	青	1~2.5cmの灰・黄・青・乳白色の粒を多く含む。	
393	土師器	高坏・胎部	V層	(14.52)			ナゲ	ナゲ	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	1~2cmの青・灰・黄・褐色の粒を多く、0.5cm以下の透明光沢及び、灰白を少量含む。	
394	土師器	高坏・胎部	V層				風化の為、 調整不明	ナゲ	青	青	青	青	2cm程度の灰・灰白色の粒をわずかに含む。	
395	土師器	小型高坏・胎部	V層				ナゲ	風化の為、 調整不明	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	1cm程度の灰・灰白色の粒を少量含む。	
396	土師器	高坏・胎部	V層				丁寧なナゲ	ナゲ	黄褐色	灰白	灰白	灰白	1cm程度の灰・灰白色の粒を少量含む。	
397	土師器	器台・胎部	V層				ナゲ	ナゲ	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	1~1.5cmの青・褐色の粒を少量含む。	穿孔
398	土師器	鉢・口縁	V層	(17.1)			ナゲ	ナゲ	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	3cm以下の灰白・褐色の粒を多く含む。	
399	土師器	小型土器(鉢)・底部	V層		21		ナゲ	ナゲ	明赤褐	青	青	青	1~2cmの灰・乳白色の粒をわずかに、1cm褐色光沢状を少量含む。	
400	土師器	小型土器(鉢)・底部	V層	7.8	1.7	3.0	ナゲ ×印の線刻	ナゲ・指痕痕	明赤褐 に青	青	青	青	1cm以下の白色・透明な粒を少量含む。	
401	須恵器	壺・胴部	V層				格子目タタキ の横ナゲ	同心円当具痕	灰	灰	灰	灰	1~2cmの乳白色の粒を少量含む。	

## 第IV章 まとめにかえて——志戸平遺跡出土の壺・壺に関する検討——

### 第1節 はじめに

志戸平遺跡と東田遺跡では弥生時代を通しての土器が多数確認できている。頭田遺跡では土器の点数、残存状況ともに良好なものが少ないので、ここでは志戸平遺跡出土の弥生土器のうち、出土点数の多い壺・壺についてその前後関係を提示しまとめにかえたい。

### 第2節 南九州弥生土器研究の現状

鹿児島県薩摩半島の南端に位置する指宿市橋牟礼川遺跡は、大正7・8年に浜田耕作、長谷部言人らによって発掘調査され、縄文土器と弥生土器の年代差が層位的に立証された初めての遺跡である（下山覚・渡部徹也1991）。このような記念碑的な遺跡を持ちつつも、南九州の弥生時代研究は長らく停滞していたといっていだろう。ここでは、南九州弥生土器編年研究の研究史を大まかではあるがたどってみたい。

南九州の弥生土器編年は、小林行雄・杉原莊介によって編集された「弥生式土器集成図録」の河口貞徳のもの<sup>1)</sup>がその初出であろう。以後精力的に南九州の弥生土器編年を行った河口は、「弥生式土器集成本編」(河口1964)や「南九州弥生式土器の再編年」(河口・出口1971)を経て1981年の「新南九州弥生式土器編年」(河口1981)を発表するにいたる。河口のこの編年案の提示により、南九州の弥生時代研究は明確な時間軸を得ることとなる。しかしながら河口編年は、1997年に中国聡による編年案(中国1997)が提示されるまで、大した批判や検証をうけることはなかった。石川悦雄(1983・1984)や中村直子(1987)等による地域や時間を限った論議はあったものの、南九州の弥生土器編年研究は停滞していたといっていだろう。中国が編年案を提示して以降、南九州の内部から目立った検討が加えられていない現状をみると、この停滞は現在もまだ継続しているとみてよいのかもしれない。石川の「問題意識の欠如しているところには、良好な資料も又求むべくもない」(石川1984)という厳しい批判は、今日まで生き続けているといえる。

翻って、宮崎県下の弥生土器研究をたどっていくと、石川(1984)の論文以来、大系だったものは何一つできていないのが現状である。いくつかの報告書(長津1985・北郷1988)に編年案が提示されたものの、編年根拠が不明確であったり、単に石川編年のトレースに遺跡での新資料を追加したものであったりと、「多少の誤謬を犯す危険は承知の上で、急務とされる白前の弥生土器編年の叩き台」として提示した本人の意思とはうらはらに、石川編年は完成品として受け取られそれを補強あるいは検証しさらなる深化を求める動きは生まれてこなかった。これは、石川自身が指摘するように、「在地の研究者の不足」と「問題意識の欠如」が大きな要因であろう。近年になり、ようやく弥生土器編年に対する再検討の気運が高まりつつある(桑畑2000①②③・松永2000)。石川により提示された弥生土器研究(弥生時代研究と言い換えてもいだろう。)の課題は、まる15年を経てようやく検討され始めた観がある。

註(1)河口1964による。諸々の事情により原書にあたることができなかった。

### 第3節 志戸平遺跡出土の壺・壺に関する検討

志戸平遺跡では、夜白式や板付式に併行すると思われるものなどから、古墳時代に至るまでの土器が出土している。洪水砂のなかの一括資料ということもあり、様式の設定や時期の決定は困難であるが、他遺跡での伴同関係や先行研究を参考にして可能な限りこれを行ってみたい。

## 1. 甕

甕Aa (47) は、縄文晩期の鉢の形態を色濃く残す。この時代の胴部が屈曲する甕については、福岡市板付遺跡G-7a・b区上層水田、那珂遺跡37次調査SD-02、津屋崎町今川遺跡V字溝下から中層出土のもの等が知られる(土器持寄会論文集刊行会2000)が、これらは全て口縁部、屈曲部に刻み目をもつものである。これに対し、志戸平遺跡出土のものは、刻み目をもたない。刻み目が退化したものと考え、これらの土器よりも、一段階新しいものと考えたい。

甕AbIは、数条の刻み目突帯があり胴部から口縁部までやや内湾気味になるもの(48~51)と、一条の刻み目突帯をもち、口縁部まで直線的に立ち上がるものとわかれる。前者は大分県台ノ原遺跡や宮崎県中尾遺跡などで類例がみられる。後者は、典型的な下城式系の甕と考えていいだろう。前者が若干先行すると考えたい。

甕AbIII、AbIVは中溝式系の甕である。中溝式の甕に関しては、桑畑(2000③)により細かな検討が加えられている。瀬戸内系の土器との同時存在が示唆されており、中期末から後期初頭にかけての時期における。

甕Acに関しては、はなはだ前後関係の根拠が弱い。器面調整の丁寧なものから粗いものへと変化していると考え、AcIIからAcIVへの変化を想定した。AcIIについては宮崎県下那珂遺跡、熊野原遺跡B地区SA12などに類例をもとめることができる。AcIIIについては、宮崎県大戸ノ口遺跡SA13や、熊野原遺跡B地区SC1などに、AcIVについては、熊野原遺跡C地区SA12、陣ノ内遺跡SA15などに類例がもとめられる。

甕B類については、石川(1983)が指摘したように、畿内V様式の影響下に成立したものとみていいだろう。大戸ノ口遺跡や、熊野原遺跡、上園遺跡等の類例をみると、口縁部が次第に立ち上がり、頸部の屈曲が弱くなっていく傾向にあるようである。BcIIIからBcIIへの変化が迫る。

## 2. 壺

壺A(177、178)は、いわゆる板付式系の壺と考えられる。178は、頸部下部の沈線が段状になっており、177より若干先行する可能性がある。県内では、新宮町今別府遺跡の表採資料など、若干の資料が存在するが、該期の土器の供伴関係などは明確ではない。

壺B(179)は畿内や瀬戸内の弥生中期の土器に類似する口縁がみられるが、これらに比して加飾性に乏しい。若干時期差をみるべきかもしれない。

壺Cは(181~184)は口唇部に凹線文が巡るが、宮崎県新出原遺跡などの例のようにT字に肥厚した口縁部はもたない。これらのものよりは、後出するとみたほうがよいだろう。とくに184は、宮崎県川床遺跡のC-116周溝からの出土例が知られており、弥生時代終末期まで出る可能性がある。ただし、川床遺跡については報告書から出土状況等の情報がよみとれず、供伴関係の決め手に欠ける。ここでは、181から183の凹線文を施すものに継続するものと考えたい。

壺D(185、186)は畿内や瀬戸内の弥生後期の早い段階のものに類似する口縁をみる事ができる。Bと同様に加飾性に乏しい。後期前葉から中葉までの間で考えたい。

壺E、Fについては、熊野原遺跡B地区の出土の類例をみると、大きな時期差はないと思われる。後期後葉から終末期にかけての幅をもって考えたい。

壺Gは、出土数が限られており、今回の検討からはずす。

壺Hについては、二次口縁部の内傾するものから外傾するものへ、もしくはその逆の変化が考えられる。二重口縁壺については、前期古墳に伴う例を考えると、二次口縁部が大きく外傾するものが多い。対して、弥生住居に伴うものについては、内傾するものが圧倒的である。前者は祭祀用に特化した土器であり、後者は生活遺構からの出土であるので単純には比較できないが、一応、内傾するものから外傾するものへの変化を想定しておきたい。壺Hは184のようなタイプのものの影響下に成立し、最終的には全体の作りが雑になり、245のような形態になるものと考ええる。

以上の検討の結果を、縦軸に前後関係を、横軸に大まかな併行関係をしめし、第28図にまとめた。はなはだおざっぱな検討であるが、今後の弥生土器研究の一助になれば幸いである。

## 第V章 結語

志戸平遺跡は2次調査の報告時点では、鬼付女川の氾濫が激しく継続した大規模な集落や水田の経営はされていなかったであろうと結論づけられていたが、今回、同じ洪水砂のなから縄文晩期から古墳時代初頭にかけての土器が一括して出土しており、その規模はともかく弥生時代をとおして営まれた集落の存在を示唆している。風早遺跡で確認された井塚跡は、小扇状地の湧水を利用したものであったが、鬼付女川の流域に継続して水田耕地が展開していたことを否定するものではないし、ここに限らず河川の氾濫と水田の復旧の繰り返しは、低湿地での水田耕作にはつきものであったろう。現在も鬼付女川の氾濫が大きな災害を生む可能性をもつことには変わりなく、弥生人にはその危険を冒してまでこの地に水田を経営するメリットがあったのだらう。今後の発掘調査の進展により、これらの問題点、疑問点への解答とさらなるデータの集積が得られることを期待したい。

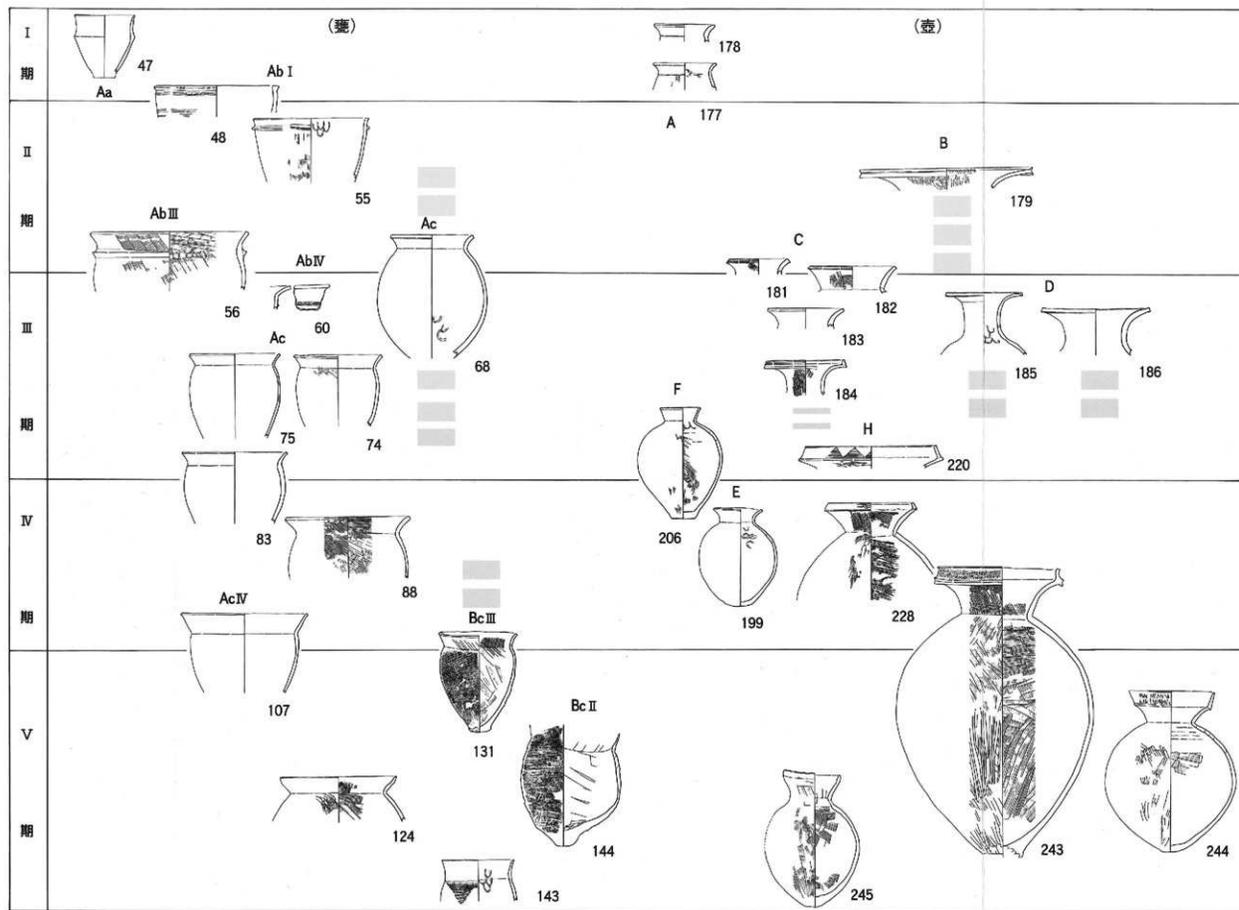
なお、本報告書をまとめるにあたり、多くの方々のご指導、ご教示を賜った。末尾ではあるが、これらの方々のお名前を列挙し、謝辞にかえたい。

有馬義人・秋成雅博・石川悦雄・谷口武範・松永幸寿・柳沢一男（50音順・敬称略）

### 参考文献

- 阿萬美水 1992 「自然と風土」『新富町史』通史編  
 有田美美 1992 「原始」『新富町史』通史編  
 石川悦雄 1983 「日向における外冨系土器の伝播とその地域性（1）-瀬戸内・畿内系土器の流入とその展開-」『研究紀要』9  
 石川悦雄 1984 「宮崎平野における弥生土器編年試案-素描（MK-II）」『宮崎考古』9  
 上原真人 1993 「B 農具」『木器集成図録』近畿原始論（解説）  
 小田富士雄 1958 「下城式土器考」『白濁遺跡』  
 河口貞徳 1964 「南九州地方」『弥生式土器集成』本編  
 河口貞徳 1981 「新南九州弥生式土器編年」『鹿児島考古』15  
 河口貞徳・出口浩 1971 「南九州弥生式土器の再編年」『鹿児島考古』5  
 桑畑光博 2000 ① 「中溝式土器の再検討」宮崎考古学会第39回例会発表資料  
 桑畑光博 2000 ② 「折衷土器二例」『大河』7  
 桑畑光博 2000 ③ 「中溝式土器の検討-宮崎県における弥生中期前半から後期前半にかけての土器編年における-」  
 『古文化談叢』45  
 後藤宗俊 1975 「台ノ原遺跡出土弥生土器の編年」『台ノ原遺跡』  
 下山寛・渡部徹也 1991 「橋幸礼川遺跡」『福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書』（9）  
 菅直 1994 「『水辺』の開拓史-低湿地農業は、はたした否定的（ネガティブ）な農業技術か？」『国立歴史民族博物館研究報告』

- 鈴木重治 1985 「瀬戸内系文化と日向型壺穴住居」『日本の古代遺跡』25 宮崎
- 高橋徹 2000 「下城式土器周辺」『突帯文と遠賀川』
- 田崎博之 1998 「九州系の土器からみ大田線文系土器の時間位置」『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』
- 王永光洋・小柳和宏 1985 「壺の弥生土器」『えとのす』29
- 坪根伸也 2000 「弥生文化成立期の具体像（東九州）」『第47回埋蔵文化財研究集会 弥生文化の成立-各地域における弥生文化成立期の具体像-』
- 坪根伸也 2000 「東部九州における弥生前期土器の糖柑-「口縁下窪凸状壺」と下城式壺-」『突帯文と遠賀川』
- 寺沢薫・森岡秀人編 1990 「弥生土器の様式と編年」近畿編Ⅱ
- 堂込秀人 2000 「南九州における弥生文化成立期の具体像」『第47回埋蔵文化財研究集会 弥生文化の成立-各地域における弥生文化成立期の具体像-』
- 中國聡 1986 「弥生土器について」『鹿児島大学都元部地内遺跡（J・7地点）』
- 中國聡 1994 「弥生時代開始期の壺形土器-土器作りのモーターハビットと認知構造-」『日本考古学』1
- 中國聡 1997 「九州南部地域弥生土器編年」『人類学研究』9
- 長津宗重 1985 「弥生後期-古墳時代初期の土器編年表」『国富町文化財調査資料』第4集
- 中村直子 1987 「成川式土器再考」『鹿大考古』6
- 北郷幸道 1988 「まとめ-弥生土器期のⅢ期編年を中心として-」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第4集本文編
- 正岡睦夫・松本岩雄編 1992 「弥生土器の様式と編年」山陽・山陰編
- 松永幸寿 2000 「宮崎平野部における弥生時代後期から古墳時代にかけての壺の形式変遷」『宮崎考古学会第39回例会発表資料』
- 豆谷和之 2000 「遠賀川式土器の成立」『第47回埋蔵文化財研究集会 弥生文化の成立-各地域における弥生文化成立期の具体像-』
- 森岡秀人 1986 「高地性集落」『弥生文化の研究』7 弥生集落
- 日本考古学協会 1960 『日本農耕社会の生成』
- 土器持寄会論文集刊行会 2000 「突帯文と遠賀川』
- 大分県教育委員会 1975 『合ノ原遺跡』大分県文化財調査報告第33輯
- 宮崎県 1994 『宮崎県史』資料編考古1
- 宮崎県教育委員会 1994 「三納地区遺跡群 城ノ下遺跡 柳原遺跡 志戸平遺跡（2次）」
- 宮崎市教育委員会 1999 「下郷遺跡」宮崎市文化財調査報告書第41集
- 高鍋町教育委員会 1982 「持田中尾遺跡発掘調査概要報告書』
- 新富町教育委員会 1983 「鏡遺跡・藤掛遺跡」新富町文化財調査報告書第2集
- 新富町教育委員会 1986 「川床遺跡」新富町文化財調査報告書第5集
- 新富町教育委員会 1992 「風早第Ⅰ・第Ⅱ遺跡」新富町文化財調査報告書第14集
- 新富町教育委員会 1997 「平成8年度 町内遺跡発掘調査概要報告書」新富町文化財調査報告書第21集
- 新富町教育委員会 1998 「平成9年度 町内遺跡発掘調査概要報告書」新富町文化財調査報告書第24集
- 国富町教育委員会 1995 「原原遺跡東原A・B・C・D地点」国富町文化財調査報告書第6集



第28図 志戸平遺跡出土壺・甕 編年図(案)

S=1/8

## 付 編 自然科学分析調査報告

株式会社 古環境研究所

### 第1節 志戸平遺跡出土試料の放射性炭素年代測定結果

志戸平遺跡から出土した試料について年代測定を行った。その結果を次表に示す。なお、年代値は1950年よりの年数 (B.P.) である。

年代値の算出には<sup>14</sup>Cの半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用している。また、付記した誤差は $\beta$ 線の計数値の標準偏差 $\sigma$ にもとづいて算出した年数で、標準偏差 (ONE SIGMA) に相当する年代である。また、試料の $\beta$ 線計数率と自然計数率の差が $2\sigma$ 以下のときは、 $3\sigma$ に相当する年代を下限の年代値 (B.P.) として表示してある。また、試料の $\beta$ 線計数率と現在の標準炭素 (MODERN STANDARD CARBON) についての計数率との差が $2\sigma$ 以下のときは、Modernと表示し、 $\delta^{14}\text{C}\%$ を付記してある。

表 志戸平遺跡の放射性炭素年代測定結果

試料No	試料	年代値
No 1	炭化物	3,960 ± 150 (B.C.2010)
No 2	炭化物	2,870 ± 110 (B.C. 920)
No 3	炭化物	4,310 ± 80 (B.C.2360)
No 4	炭化物	3,750 ± 80 (B.C.1800)
No 5	炭化物	3,800 ± 80 (B.C.1850)
No 6	炭化物	1,100 ± 60 (A.D. 850)
No 7	炭化物	4,740 ± 150 (B.C.2790)
No 8	炭化物	4,380 ± 100 (B.C.2430)
No 9	炭化物	3,810 ± 120 (B.C.1860)
No10	炭化物	3,890 ± 80 (B.C.1940)
No11	炭化物	4,530 ± 140 (B.C.2580)
No12	炭化物	4,310 ± 80 (B.C.2360)
No13	炭化物	3,750 ± 80 (B.C.1800)
No14	炭化物	3,800 ± 80 (B.C.1850)
No15	炭化物	1,100 ± 60 (A.D. 850)
No16	炭化物	4,740 ± 150 (B.C.2790)

### 第2節 頭田遺跡における自然科学分析

#### I. 頭田遺跡から出土した木材の樹種同定

##### 1. 試料

試料は、頭田遺跡のV層から出土したNo.2～5の4点の木材である。

##### 2. 方法

カミソリを用いて試料の新鮮な基本的三断面 (木材の横断面、放射断面、接線断面) を作製し、生物

顕微鏡によって60～600倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

### 3. 結果

結果を表1に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

表1 粟田遺跡出土木材の樹種同定結果

試料	樹種 (和名/学名)	
No 2	コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis
No 3	コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis
No 4	スタジイ	Castanopsis sieboldii Hatusima
No 5	ヒサカキ属	Eurya

#### a. スタジイ *Castanopsis sieboldii* Hatusima ブナ科 図版1

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりスタジイに同定される。スタジイは本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽、保存性やや低く、建築、器具などに用いられる。

#### b. コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版2

横断面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靱、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

#### c. ヒサカキ属 *Eurya* ツバキ科 図版3

横断面：小型の道管が、ほぼ単独で密に分布する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く100を越えるものがある。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～2細胞幅で、多列部と比べて単列部が長い。

以上の形質よりヒサカキ属に同定される。ヒサカキ属にはヒサカキ、ハマヒサカキなどがあり、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、通常高さ10m、径30cmである。材は強さ中庸で、

器具などに用いられる。

#### 4. 所見

原田遺跡のV層から出土した木材は、コナラ属アカガシ亜属、スダジイ、ヒサカキ属の3種類であった。いずれも照葉樹林の主要構成要素である。

#### 参考文献

佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞。木材の構造, 文芸堂出版, p. 20-48.

佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞。木材の構造, 文芸堂出版, p. 49-100.

#### II. 原田遺跡における放射性炭素年代測定結果

##### 1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No 1	V層, No 4	木材 (スダジイ)	酸-7Mカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	$\beta$ 線法

##### 2. 測定結果

試料名	$^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	暦年代 交点 (1 $\sigma$ )	測定No (Beta-)
No 1	3000 ± 60	-28.4	2950 ± 60	BC1135 (BC1260~1030)	114268

##### 1) $^{14}\text{C}$ 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した値。 $^{14}\text{C}$ の半減期は5,568年を用いた。

##### 2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

##### 3) 補正 $^{14}\text{C}$ 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

##### 2) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度の変動を補正することにより算出した年代(西暦)。補正には年代既知の樹木年輪の $^{14}\text{C}$ の詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。暦年代の交点とは、補正 $^{14}\text{C}$ 年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 $\sigma$ は補正 $^{14}\text{C}$ 年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。

頭田遺跡出土木材の顕微鏡写真



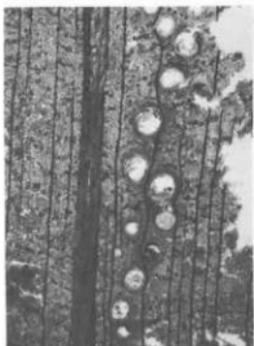
横断面 ————— :0.5mm  
1. No. 4 スダジイ



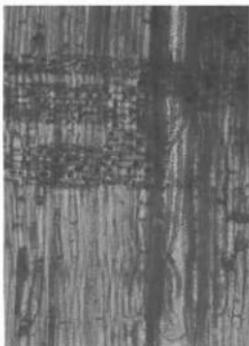
放射断面 ————— :0.2mm



接線断面 ————— :0.2mm



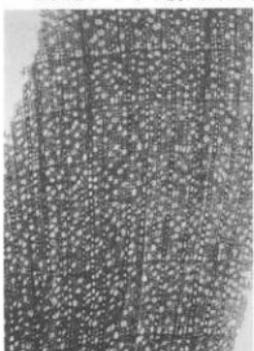
横断面 ————— :0.5mm  
2. No. 3 コナラ属アカガシ亜属



放射断面 ————— :0.2mm



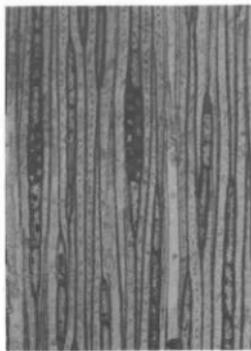
接線断面 ————— :0.2mm



横断面 ————— :0.5mm  
3. No. 5 ヒサカキ属



放射断面 ————— :0.1mm



接線断面 ————— :0.2mm

# 圖 版



志戸平遺跡C地区遠景



志戸平遺跡D地区遠景



C地区土層断面①



C地区土層断面②



D地区土層断面①



D地区土層断面②

志戸平遺跡(3次)現場写真①



D地区調査風景



D地区遺物出土状況①



D地区遺物出土状況②



二重口緑壺(244)出土状況

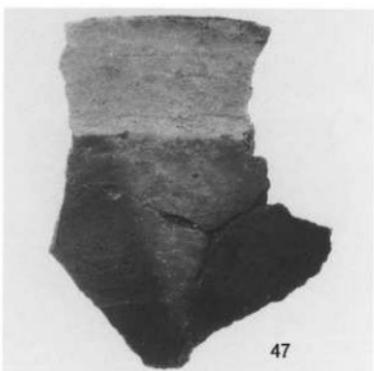
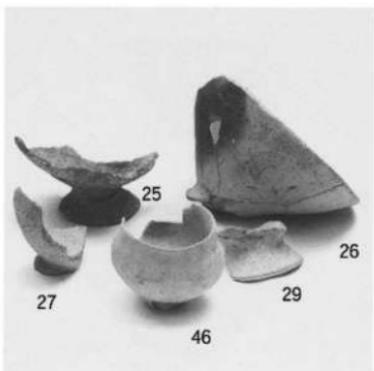
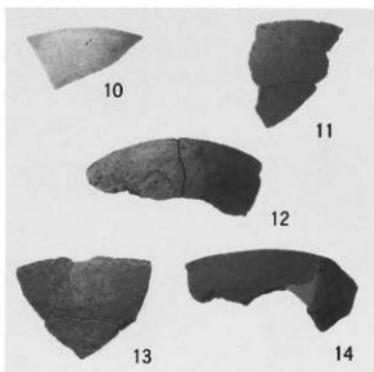
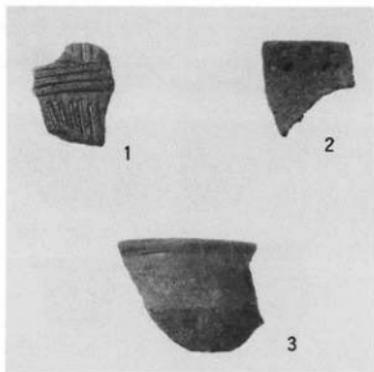


二重口緑壺(243)出土状況

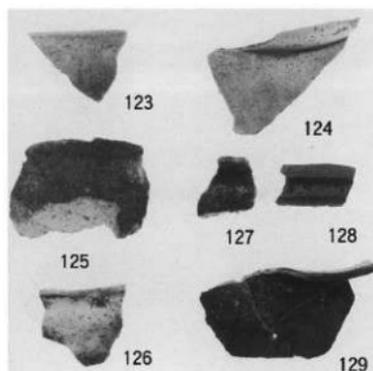
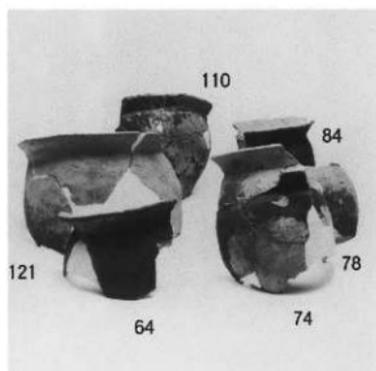
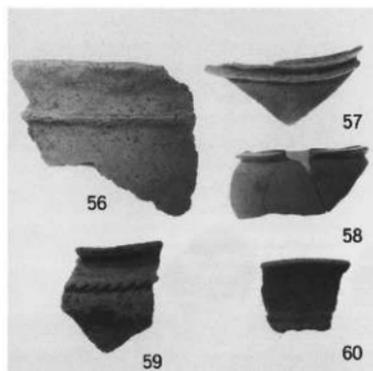
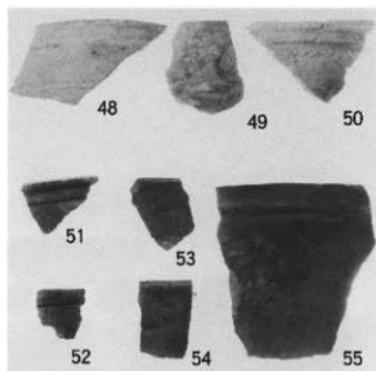


杵(379)出土状況

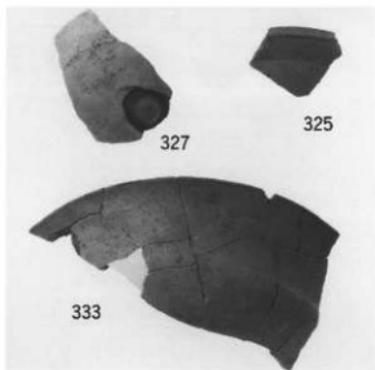
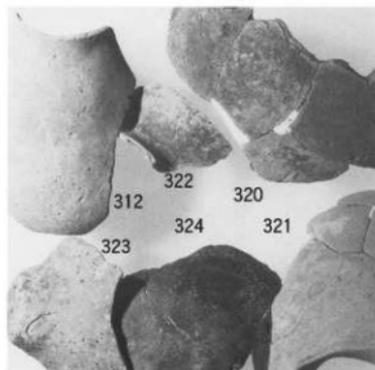
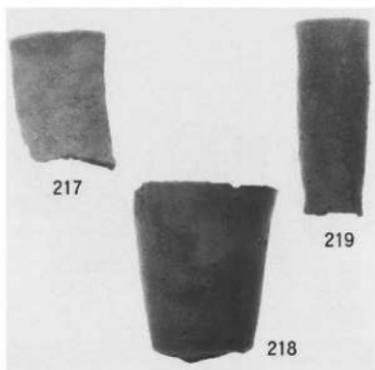
志戸平遺跡(3次)現場写真②



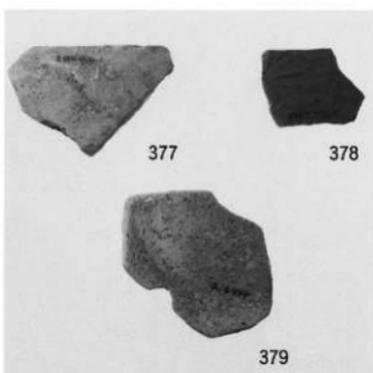
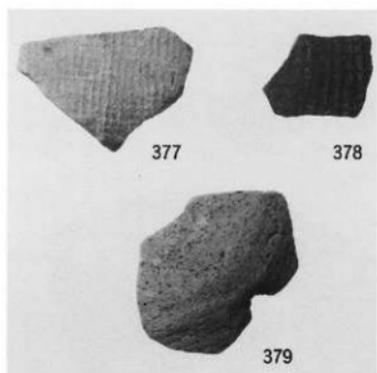
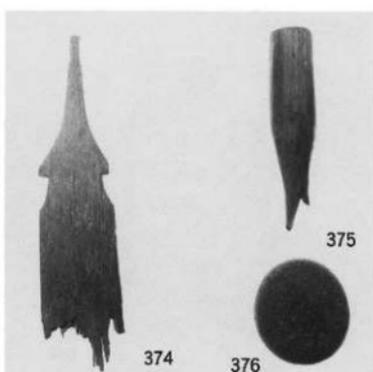
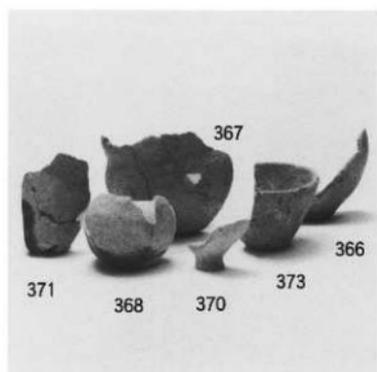
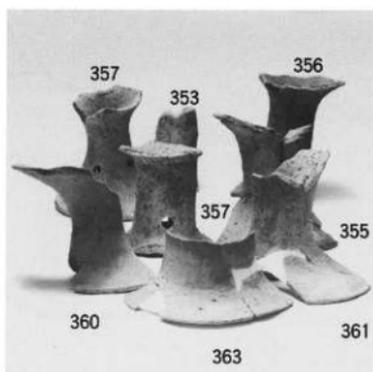
志戸平遺跡出土遺物 ①



志戸平遺跡出土遺物 ②



志戸平遺跡出土遺物 ③



志戸平遺跡出土遺物 ④



頭田遺跡遠景



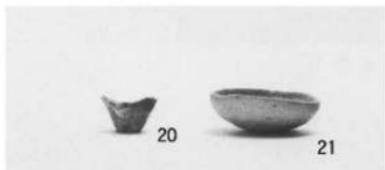
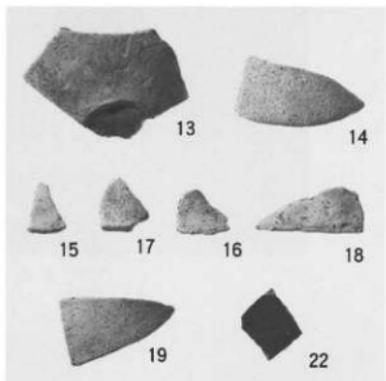
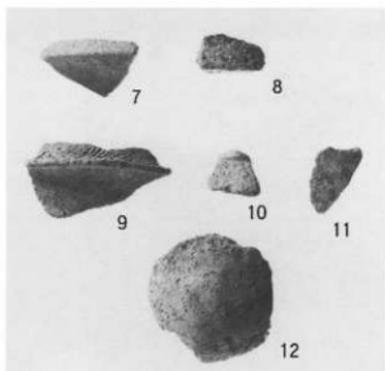
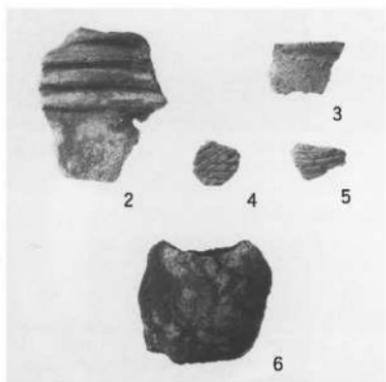
頭田遺跡全景



木片検出状況（北から）



木片検出状況（東から）



頭田遺跡出土土器

## 報告書抄録

フリガナ	シドヒライセキ(3ジ)・カシラダイセキ					
書名	志戸平遺跡(3次)・頭田遺跡					
副書名	鬼付女川河川改良事業に伴う発掘調査報告書					
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書					
シリーズ番号	第46集					
編集者名	高橋 誠・和田 理啓					
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター					
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地					
発行年月日	2001年3月					
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
シドヒライセキ	ミヤザキケンコウダクシントミ	32° 4' 22"	131° 29' 14"	1994.11.28 -12.26	1500㎡	鬼付女川 河川改良
志戸平遺跡	チヨウオオアザミナシロ	付近	付近	1995.12.11 -1996.1.19		
カシラダイセキ	宮崎県児湯郡新富	32° 4' 28"	131° 29' 12"	1997.11.25	350㎡	事業
頭田遺跡	町大字三納代	付近	付近	-12.25		
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
散布地	弥生・古墳	鬼付女川の旧河道		弥生土器、土師器、 ナスビ形木製品		弥生前期 の上器・ 木製農具

---

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第46集

鬼付女川(河川)改良事業に伴う発掘調査報告書

**志戸平遺跡(3次)・頭田遺跡**

2001

編集・発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212  
宮崎県宮崎郡龍土町大字下郡町4019番地  
Tel. (0985) 36-1171 (代表)

印刷 株式会社 宮崎南印刷

〒880-0911  
宮崎県宮崎市大字田吉350番地  
Tel. (0985) 51-2745 (代表)

---